

楽浪平底壺の研究

—分類・製作技法・編年の再構築—

鄭 在炫

要旨

楽浪土器の研究は、1980年代以降、土城址出土資料の分析を基盤として、胎土・器形・製作技法を中心とする一定の体系を築いてきた。そのなかでも、主として墳墓出土品によって代表される平底壺は、他の器種に比べて個別の検討が相対的に乏しく、分類や製作技法といった具体的な様相が十分には明らかにされてこなかった。器種区分の基準が定着していなかったことにより、器種および型式ごとの時期的展開についても十分な議論が行われてきたとはいえない。本稿はこうした問題意識に立ち、分類・製作技法・編年という三つの側面から楽浪平底壺を総合的に検討することを目的とする。検討対象には、近年の報告例に加え、北韓考古学界において未検討の資料や、韓国国立中央博物館E-ミュージアム登録品など、従来の研究では十分に活用されてこなかった新資料を幅広く含めた。まず分類においては、計測可能な属性を生かして器種および型式区分を明確にし、実物観察を通じて楽浪平底壺に共通して認められる定型化された製作技法とともに、器種ごとにみられる製作技法上の特徴を具体的に把握した。さらに、一部の型式にのみ現れる細部の特徴を明らかにすることができた。次に、土器とともに出土した銅鏡などの共伴遺物や紀年銘資料、墳墓形式を基準として時期を比定することにより、平底短頸壺と平底長頸壺の編年を再構築することができた。その結果、両器種はいずれも前1世紀後半に出現し、後3世紀以降まで継続するなかで、器高の増大とサイズの大型化を伴いながら、Ⅰ類からⅡ類へと移行していく大きな流れを示している。ただし、その過程では、出現期における様相や時期ごとの比重の違い、製作技法の採用のされ方などに差異が認められ、各器種の異なる展開も把握することができた。

1. 研究史の検討及び研究目的

1-1. 先行研究の検討

平坦な底部をもつ壺、いわゆる「平底壺」は、楽浪土器を構成する主要な器種群の一つである。楽浪土器は、大きく墳墓¹⁾資料と土城資料に二分され、これまでの研究は主として土城資料を中心に進められてきた。代表的には、谷(1984, 1985, 1986)や鄭仁盛(2002)が、胎土・器形・製作技法の具体的特徴を明らかにすることで、楽浪土器研究の基礎を築いている。しかし、平底壺は主として墳墓から出土し、土城における出土例はきわめて少ないうえ、完形資料の確保も困難であるため、土城資料のみで平底壺の特徴を十分に把握するには限界がある。それでも、先行研究は平底壺の製作過程を理解するうえで重要な手がかりを提示している。

まず、谷(1986)は、土城出土の平底壺に確認される「の」字状の調整痕、ヘラ削り、糸切り痕といった製作技法上の特徴を観察し、これを軟質灰色系土器の成形方法と関連づけて指摘した。検討対象は土城出土品が中心であったものの、平底壺の主要な特徴を成す底部の製作手法について基礎的な理解を得ることができた。一方、鄭仁盛(2002)は、土城出土の平底壺の

みならず、石巖里205号墳・石巖洞古墳など東京大学(文学部考古学研究室、工学部建築学研究室など)所蔵の墳墓資料をあわせて観察し、平底壺の製作工程を復元した。氏は、平底壺において成形段階の区分が絶対的に明確とはいえないことを前提とし、成形の基盤が叩きであるのか、あるいは回転ナデであるのかを基準として一次・二次成形を区分している。

つまり、底部の円盤に粘土帯を積み上げ、叩きを加える過程を一次成形とし、その後回転ナデによって器形を整えていく過程を二次成形と捉えたのである。この過程において、氏は平底壺が一次成形段階においてすでに胴部を膨らませながら製作された可能性を示し、また一部資料で頸部外側に残る縄文叩き痕を初めて確認した。これは一次成形の具体的様相を理解するうえで極めて重要な観察であり、その後の墳墓出土品を検討した研究(이나경 2013, 2022; 정재현 2022)でも認められている。氏の研究は、当時の限られた資料のもとでも平底壺の主要な成形技法を実証的に示した点で、先行研究として大きな意義を有している。

本研究の中心対象となる墳墓出土品においては、二つの研究が注目される。まず製作技法では、오영찬の研究(2001)を挙げることができる。氏は、平底壺を

頸部の長さによって平底短頸壺と平底長頸壺に大別し、韓国国立中央博物館所蔵品を精密に観察することで、水挽き、方形痕、静止糸切り痕・回転糸切り痕、漆塗りや凹凸による文様効果など、多様な製作技法上の特徴を明らかにした。こうした細部痕跡に基づき、楽浪では粘土帯の積み上げ成形と粘土塊から一気に挽き上げる成形（水挽き技法）という二つの成形方式が併存したと推定し、これを平底短頸壺から平底長頸壺への移行と関連する前後関係として捉えた。平底壺における器種区分を試み、製作技法の時期性を指摘した点で、従来研究を補完する新たな成果を示している。ただし、以上で述べた研究は楽浪平底壺の製作技法的考察が中心であったため、型式単位の分類や、それに基づく編年の検討には至っていない。

編年に関しては、高久（1995）の研究が代表的である。氏は、楽浪土器の壺を「広口短頸壺」と「壺」²⁾に大別したうえで型式を区分し、おおよそその変遷を明らかにしている。これにより、楽浪地域における壺全体の変遷を初めて把握することが可能となった。しかし、氏が述べるように、楽浪土器は墳墓から多量に出土しているにもかかわらず、公表された図面や写真資料が少なく（高久 1995：39 頁）、また前述のように墳墓出土品における製作技法の観察が本格的に進むのは 2000 年代以降であった。このような研究環境上の制約に加え、氏の当初の研究目的が、土器・銅鏡・文様埴・紀年銘を総合して楽浪墳墓の編年を構築することであったため、平底壺は主として編年の指標の一つとして扱われた。その結果、具体的な分類に基づく製作技法や展開といった詳細な論点は、補完すべき課題として残された。

その後 30 年余りの間に、韓半島³⁾ 西北地域⁴⁾ をはじめ東アジア各地で楽浪土器の新たな資料が蓄積され、それらを総合的に比較・検討するためにも、分類・製作技法・編年といった平底壺の基礎的体系を再整備する必要性が示されている。

1-2. 研究目的と課題

先行研究から明らかなように、楽浪平底壺は土器群全体の一部として扱われ、個別の器種として分類・製作技法・編年を総合的に検討した研究は十分とはいえなかった。しかし、平底壺は多様な製作技法的要素が観察されるだけでなく、楽浪土器の中でも時期的変遷を把握しやすい器種といえる。

近年、韓国国立中央博物館による一連の楽浪墳墓の再報告（国立中央博物館 2018, 2021, 2022）や、墳墓出土土器に対する再検討（이나경 2022）が行われ、楽浪土器の分析対象が大きく増加した。さらに、こ

れまで十分に扱われてこなかった 2000 年代以降の北韓⁵⁾ 学界の報告、国立中央博物館所蔵品（E-ミュージアム登録品）、梅原考古写真資料庫（database）（朝鮮之部）、ガラス乾板写真などにも未検討資料が少なくない。こうした研究環境の向上は、楽浪平底壺の精密な分析を可能とする基盤となり得る。

本研究は、先行研究において楽浪平底壺の器種および型式区分の基準が明確に示されてこなかった点を問題として捉え、基礎資料を新たに集成するとともに、製作技法および編年的分析を行うための分析単位としての分類基準を整備することを出発点とする。これを踏まえ、楽浪平底壺の製作技法と編年を再整理し、楽浪土器体系の内部において平底壺が占める時期的・技法的な位置づけをより明確にすることを目的とする。こうした作業は、他器種との比較のための基礎資料を提供することを通じて、将来的には楽浪土器全体の編年体系の整備にも寄与するものと期待される。

1-3. 研究対象及び資料環境

本稿の対象資料は、墳墓出土品を中心に一部の土城⁶⁾ 資料を含めて設定した。その範囲は、平壤大同江南岸一帯に位置する楽浪土城と、その周辺に分布する楽浪墳墓出土品を中心とする。ここは、楽浪郡の治所と推定される土城と、その周辺の墓域が複合的に分布する区域であり、楽浪土器の生産と消費が集中的に展開した中心地と想定される。このほか、楽浪平底壺が出土した韓半島西北地域一帯の遺跡も含めて分析を行った（図 1）。

本稿で扱う対象資料は、調査時期によって取扱いに一定の差異が認められるため、その点について簡単に述べておく必要がある。楽浪土器は、1909 年に墳墓から発見されて以来、およそ一世紀にわたり複数の機関によって調査・報告が重ねられてきた結果、膨大な資料が日本・北韓・韓国の各種機関に分散している。これらは大きく、1945 年以前と、1946 年以後に区分される。

1945 年以前の資料は、日本によって発掘が主導され、北韓に残存した資料を除けば、その大半は日本と韓国に分散している。日本には土城出土品が、韓国には墳墓出土品が多く所在する。韓国国立中央博物館には、ガラス乾板写真・博物館公文書・実物資料など、1945 年以前に日本が収集した多様な資料が移管されている。選別された一部の資料については、出土位置・共伴遺物・墓制形式の確認が可能であり、編年的検討を行うことができる。しかし、正式な報告がなされた資料は全体に比してかなり少ない。

一方、韓国の博物館が所蔵する実物資料は、完形に

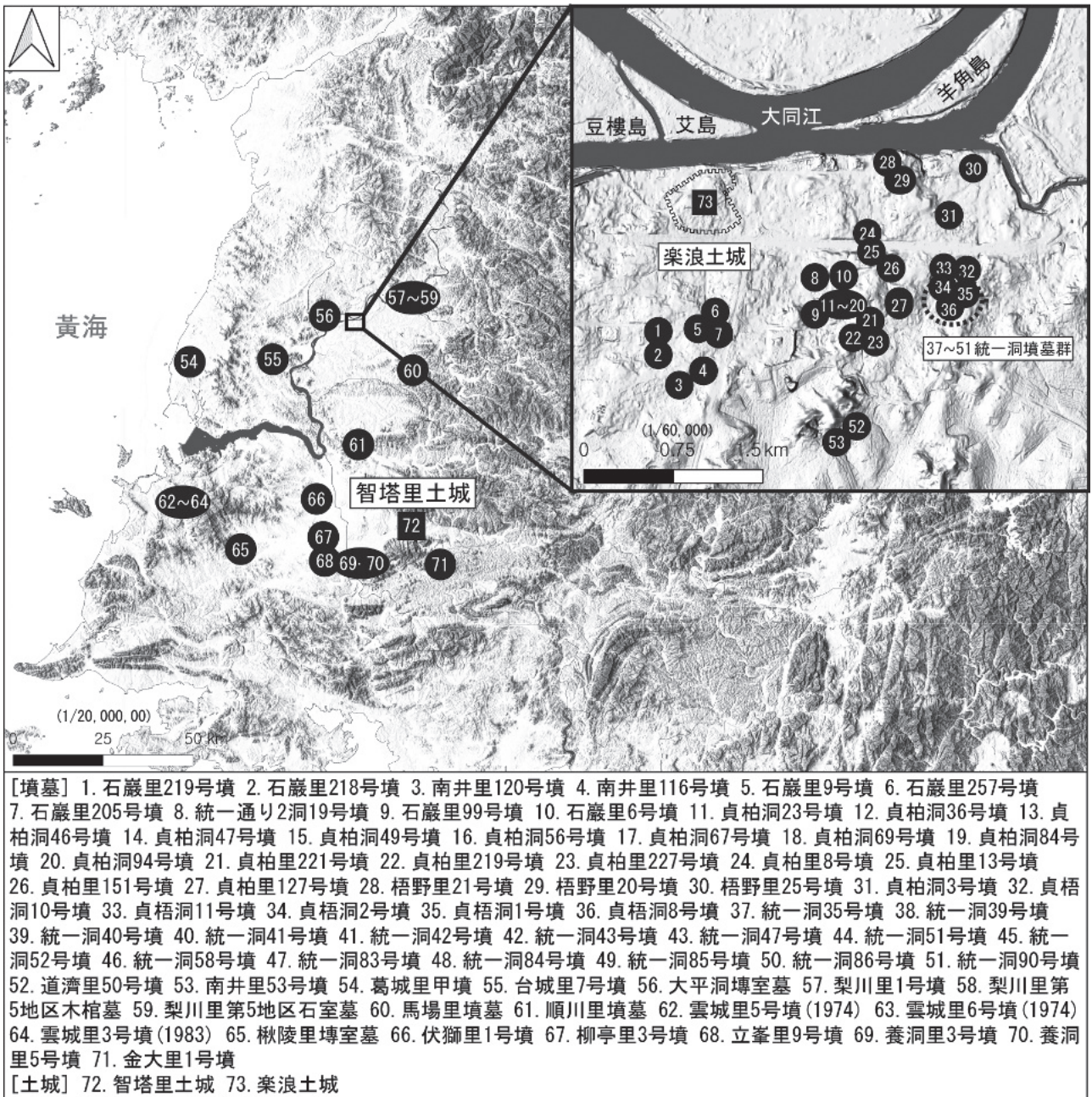


図1 本稿の主な対象遺跡の分布

近い墳墓出土例が多く、製作技法の詳細な観察が可能である。しかし、アクセスが難しく長期間にわたり検討が進まなかったものや、出土位置を確認できない資料も多く、編年研究における一つの課題となっている。そこで本稿の検討では、「古蹟」や「本館」⁷⁾のうち、樂浪資料として登録される、あるいは樂浪資料に比定される事例を、製作技法の検討において中心的に活用することとした。これらの資料は樂浪墳墓出土品が大半を占め、今後、出土地の比定など継続的な追加検討が進めば、分析を支える基礎資料となり得る。

1946年以後の資料には、その大部分が北韓によって調査されており、主として北韓側の報告書に依拠し

ている。これらの資料も、1945年以前の資料と同様に発掘成果が全面的に公開されず、選別的に報告される場合が多い。ただし、1945年以前の調査資料に比べ、出土地・墓制・共伴遺物等の記載が明確なものが多い。しかし、実見が不可能で、個々の遺物に対する記述が簡略な例が大半を占めるうえ、図面・図版の有無や精度にも大きな差異が存在し、資料間の情報量には相当の開きがみられる。

それにもかかわらず、1950年代以降に刊行された発掘報告書の中には、十分に検討されていない事例が少なくない。ただし北中共同発掘報告書（鄭永振・李東輝・鄭京日2014）のように、詳細な記述と豊富な

図面・図版を備えた例もある。このような資料は、比較的解像度の高い検討を可能とし、明確な出土地情報を確認できる場合が多いため、編年の位置をより具体的に把握するうえで重要な根拠となる。

本研究では互いの情報を補い合う形で検討を進めた。まず、前述の差異を踏まえ、各資料について実物・図面・図版・記述を相互に照合・検討し、活用し得る情報を選別的に組み合わせつつ、同時にデータベース化を行った。計測値に関しても、信頼し得る計測情報に基づき、平底壺の分類に活用した。次に、1945年以前の資料を中心に実見観察を行い、胎土、成形・調整、色調などの製作技法の情報を詳しく把握・復元し、その成果については第3章「楽浪平底壺の製作技法の検討」で述べる。

出土地・共伴遺物・墓制情報を明確に確認できるデータを整備し、第4章「楽浪平底壺の編年と展開」における検討を行った。その中で、出土地が不明確な資料については、1945年以前に調査された資料に関する報告書、韓国に残存するガラス乾板写真およびE-ミュージアム資料、日本東洋文庫所蔵の梅原考古写真資料庫(database)(朝鮮之部)など、当時の調査記録と実物資料を相互に照合することによって、出土地の比定を試みた⁸⁾。

以上の手続きを通じて、製作技法の検討では、出土地が確定した墳墓出土品、不明な墳墓出土品、および楽浪土城・智塔里土城などの土城出土品を併用した。一方、編年の検討では、出土位置を比定し得る墳墓出土品を中心に進めた。異なる資料環境において得られる記述情報と年代情報の性格を踏まえ、それぞれに適合する対象資料を中心に分析を行った。こうした過程を経て、楽浪平底壺のデータベースを新たに整えた。

2. 楽浪平底壺の器種及び型式の分類

2-1. 器種区分

楽浪土器に対する名称は学界によって差異がみられ、研究者ごとに用語も異なっている。とりわけ壺については、区分基準および用語がそれぞれ異なる状況にある(図2)。まず、北韓および中国の学界では、統一的な基準に基づくというよりも、多様な属性に基づいて用語が用いられる傾向がみられる。北韓学界では、「배부른단지」のように形態を説明する場合もあるが、「검은단지」「회색단지」「노끈무늬단지」などのように、色調や製作技法を中心として記述されることも多く、図面や図版が示されない報告では明確な器種判別が困難な例が少なくない。一方、中国学界でも、形態・文様・色調に応じて、鼓腹罐・縄文罐・黒灰陶罐・灰陶罐などが併用されている。これに対し、韓国および日本学界では、土城出土品(谷1985, 1986; 鄭仁盛2002)と墳墓出土品(高久1995; 오영찬2001; 이나경2022)によって用語の違いがみられる。墳墓出土品では完形資料が比較的豊富であるため、より細分された名称が用いられる傾向にある。

一方、従来研究において「壺」は、底部および頸部の形態や幅に基づき、丸底/平底、短頸/長頸、広口/細頸といった名目的属性によって区分されてきた。しかし、分類基準が明確に示されていない場合や、学界内で統一的基準が存在しないため、同一の器種であっても異なる名称が用いられる例が少なくない。そのため、日本列島や韓半島南部の出土資料に対しても「壺」として包括的に扱われたり、「小型壺」「長頸壺」「細頸壺」などが混用される状況を招いている。器種区分および範疇設定の基準は、なお十分に整理されておらず、その結果、器種・型式に基づく進んだ検討が十分に行われていないことがうかがえる。

以上の点を踏まえ、本稿では壺の「底部形態」と「頸部の高さ」を重視し、区分を試みた。第一に、底部が

日本学界		韓国学界			北韓学界		中国学界		
谷豊信 (1984~86)	高久建二 (1993)	鄭仁盛 (2002)	오영찬 (2001)	이나경 (2022)	朝鮮遺跡 遺物図鑑 (1990)	리순진· 김재용 (2002)	鄭永振· 李東輝· 鄭京日 (2014)	王培新 (2007)	
罐	軟・硬質 灰色系	泥質系 広口短頸壺A/B壺	丸底短頸壺	소형 원저단경호	배부른단지 (丸壺)	배부른단지 노끈무늬단지 회색단지 검은단지	鼓腹罐 縄文罐 黄灰陶罐 黒陶罐	鼓腹罐	
				대형 원저단경호					
			平底壺	평저단경호	평저단경호	배부른단지 (丸壺) 단지 (壺)			배부른단지 회색단지 검은단지 목긴단지
				평저장경호	평저장경호				

図2 研究者別にみた楽浪壺の分類と名称

平坦な壺類を平底壺⁹⁾とみなし、第二に、頸部長および幅に基づいて、平底短頸壺と平底長頸壺に区分した。ここでは、研究者間で判定の違いが生じることを抑えるため、定量的指標にもとづく基準を設定した。頸部の短長は器高に対する頸高、頸部の幅は胴最大径に対する口径を算出し、この「比率値」によって器種区分を行った(図3)。当該基準に基づいて分類を試みた先行研究(이나경 2013)では、平底短頸壺と平底長頸壺の群が区別される傾向が指摘されてきたが、本研究では新資料を含む対象資料の増加によって、新たな散布図を示した¹⁰⁾。

検討の結果、平底短頸壺と平底長頸壺は二つのグループとして緩やかに分けられる傾向にあるものの、両者が近接して分布する個体もある。この点は、形態的側面において両器種の間の特徴を示す資料群が存在することを示唆する。これらの資料は、従来、十分に検討されてこなかったが、平底短頸壺と平底長頸壺とのあいだに器形的類似性を示す点において、今後、相互の関係性を検討するうえで、重要な手がかりとなる可能性がある。本稿では、まず器種分類の「基準」設定に焦点を置くこととし、当該資料群の性格および両器種間の関係についての深化した論議は、今後の課題として残したい。

2-2. 型式設定

楽浪土器は器種によって大きな違いがみられるが、そのなかでも平底壺はとりわけ多様な形態を示す器種である。資料数が十分で、安定した型式設定が可能な場合もあれば、必ずしもそうとはいえない例も認められる。そのため、型式区分を細かくし過ぎると、かえって実態把握が難しくなる恐れがある。

型式区分に先立ち、一種のカテゴリとして大きく「類」単位に区分し、各類の内部では主要な属性に着目して代表的な型式を設定する方法をとった。このようにして楽浪平底壺の主要な形態を整理することを意図したが、現段階で点数が限られるものや例外的な形態を示すものについては、独立の型式とはせず、「その他」として暫定的に扱った。本稿における区分案は図4のとおりである。

一方、先に平底短頸壺と平底長頸壺を区分した散布図(図3)で示したように、形態的特徴においては両グループの分布域に互いに接近する部分もみられるものの、全体としては異なる領域を占めていることがわかる。このため、平底壺に共通する属性だけでなく、各器種において確認される異なる特徴も併せて考慮する必要がある。本稿では、こうした特徴を示す形態的属性を軸として区分を行い、さらに計量的検討を通じ

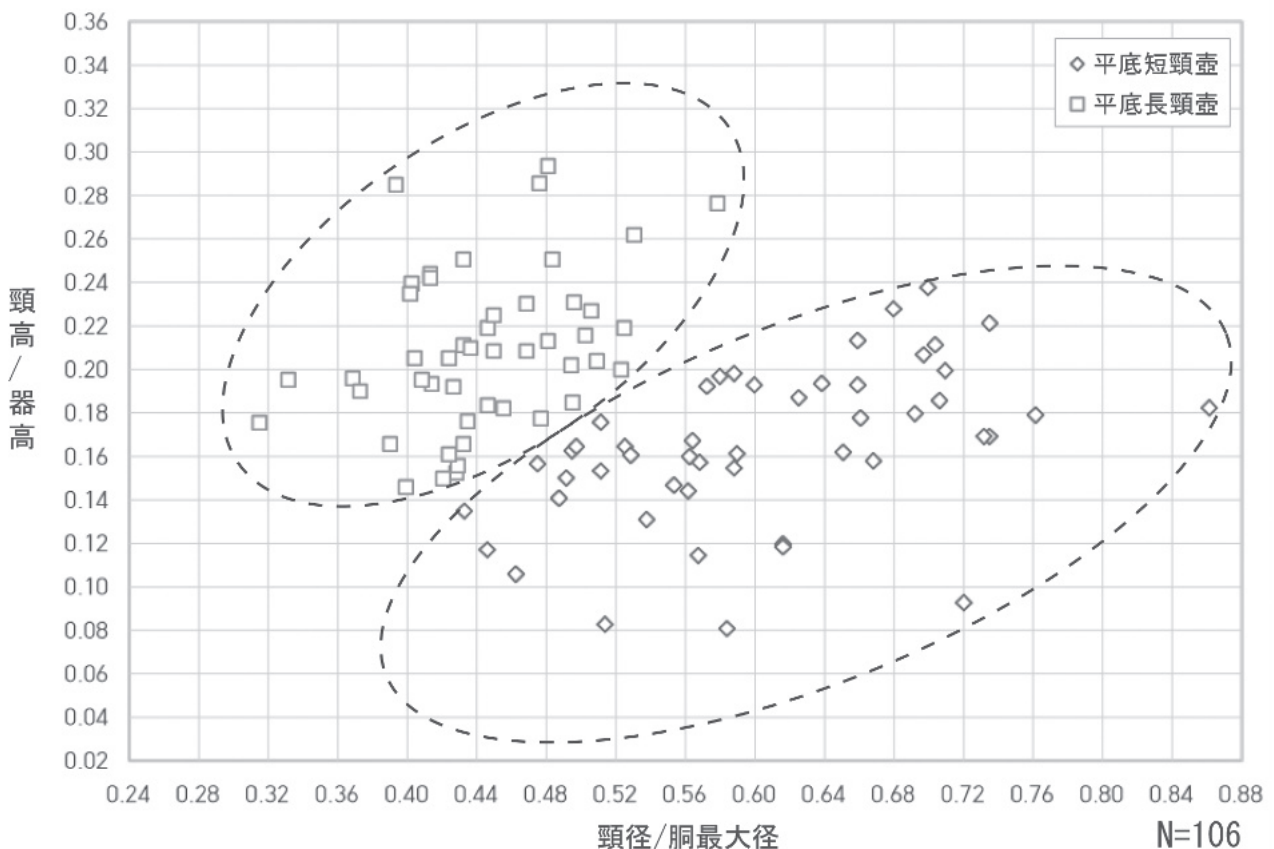


図3 平底短頸壺・平底長頸壺の器種区分散布図

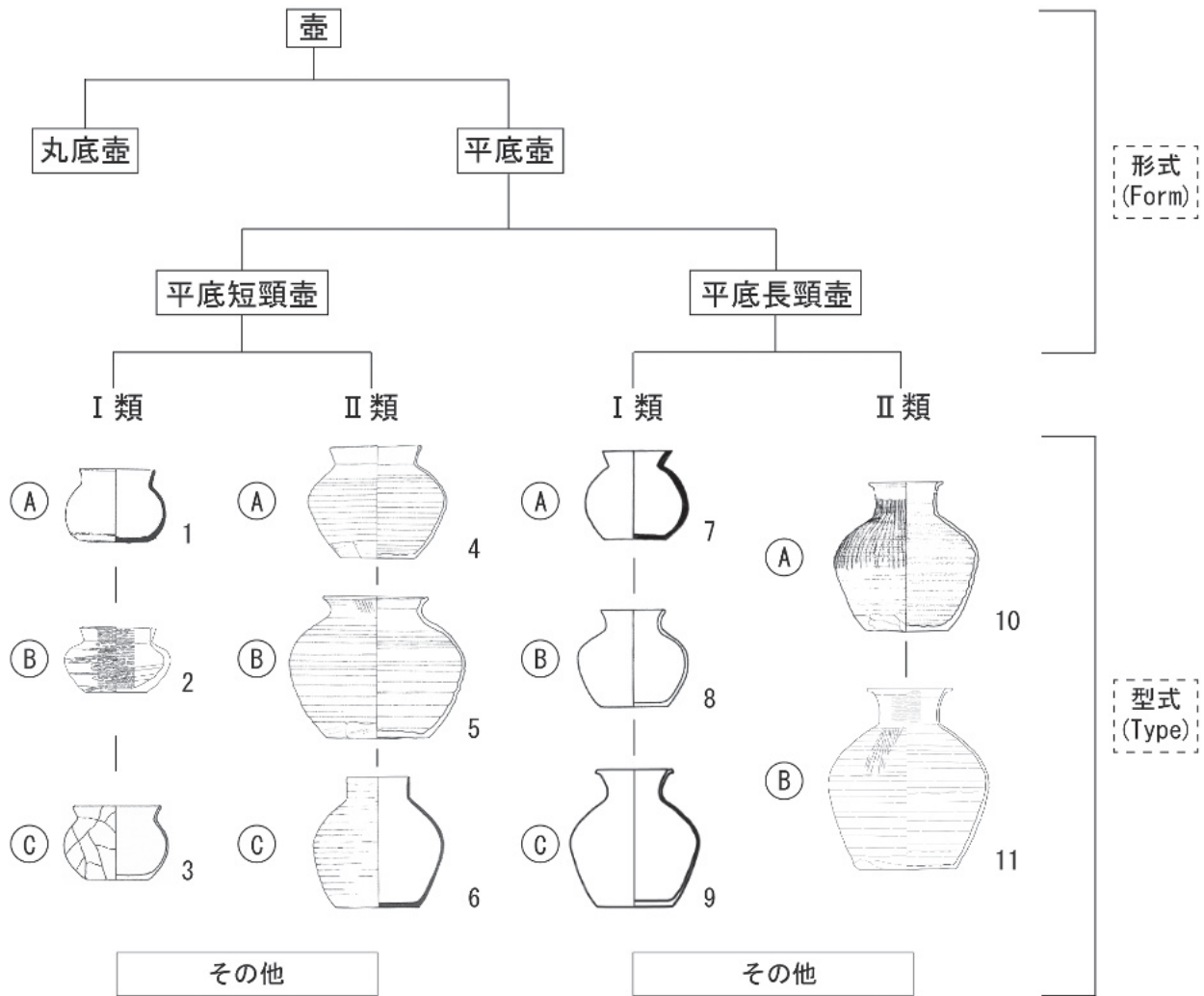


図4 本稿における平底壺の分類案

てその関係を確認する。

まず、平底短頸壺を胴部の形態によってI・II類に区分する。I類は胴部が横長の形態を示し、II類は相対的に縦長の形態を示す大きく二分される(図5)。I類では、胴最大径の位置に基づき、胴最大径が下位に位置するA型、上位に位置するB型、中位に位置するC型に区分することができる。II類は頸部形態にもとづいて区分され、頸部が直線的に外反するA型、曲線的に外反するB型、直立ないし直立気味に外反するC型という主要な型式が認められる。これらの違いは、「器高」および「胴最大径/器高」の数値からも確認される。I類は器高が低く、器高に対する胴最大径が大きい一方、II類は器高が高く、器高に対する胴最大径が小さい特徴を示す(図7)。

平底長頸壺においては、主要な属性は頸部の形態にある。I類は頸部がほぼ直線状に外反する形態を示し、II類は頸部が直立ないし直立気味に立ち上がったのち、口縁部で外反する形態として区分することができる(図6)。I類では胴最大径の位置と器高にもと

づいて細分する。すなわち、胴最大径が胴中位に位置し器高が低いA型、胴最大径が胴上位に位置しつ器高が低いB型、胴最大径が胴上位に位置し器高が高いC型である。II類は胴部形態を基準として細分され、A型はやや六角形状を呈するのに対し、B型はそれよりも胴最大径に対する頸部起点の位置が高く、比較的緩やかな長胴形となる。平底長頸壺の分類も、「器高」および「器高/胴最大径」において、その差異が確認される(図8)。I A・I B型では器高が低い一方、器高に対する胴最大径は大きい、II A・II B型では器高が比較的高く、器高に対する胴最大径は小さい傾向が認められる。ただし、I C型は、相対的に器高が高く、器高に対する胴最大径が小さいことから、数値的にはII類(とくにII A型)に近いものの、頸部形態の点ではI類に区分される点に特徴がある。

本稿における型式設定は、「類」という大きな区分単位のもとに各類の型式を設定する方法をとったものである。そして形態的属性によって型式を区分しつつ、連続型属性においても一定の相関が確認されることが

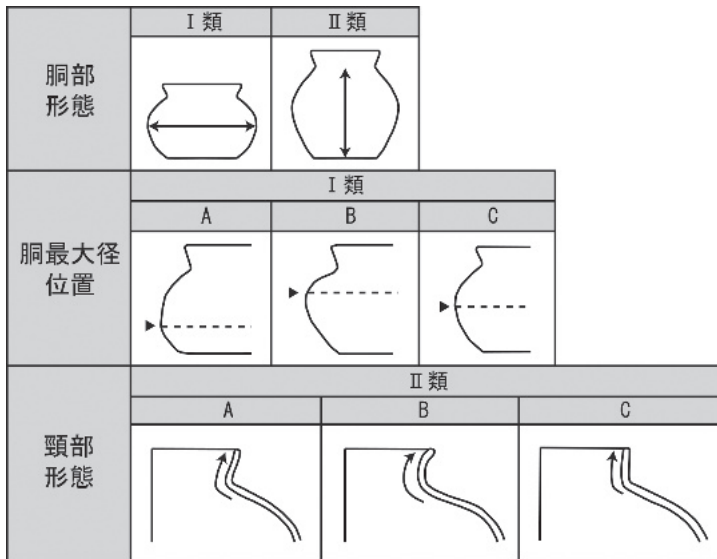


図5 平底短頸壺の型式分類

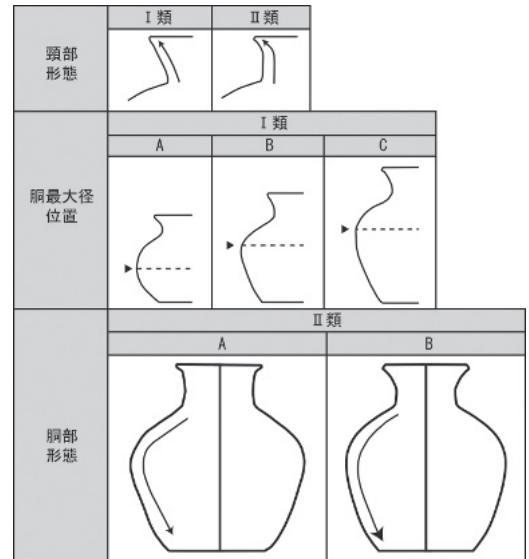


図6 平底長頸壺の型式分類

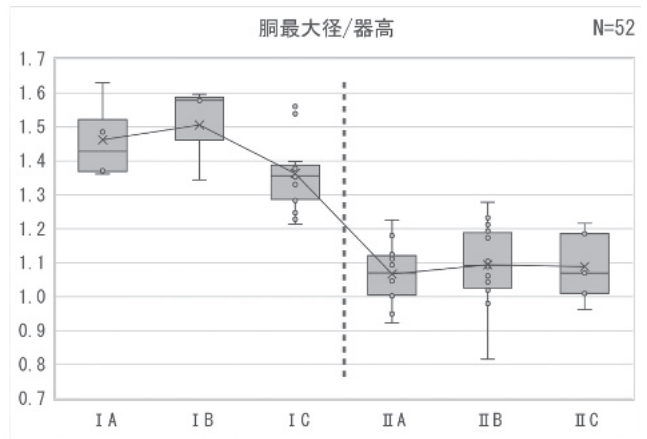
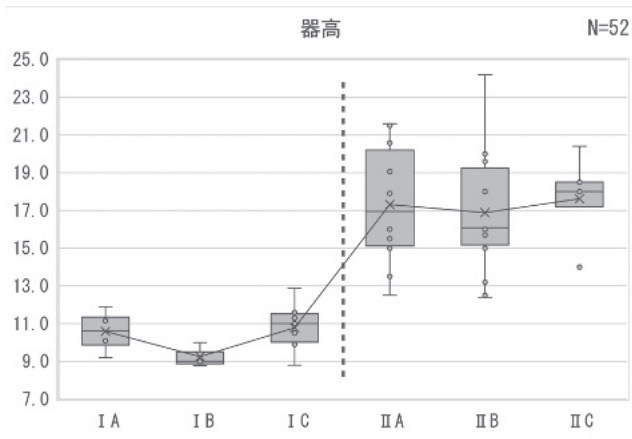


図7 平底短頸壺の箱ひげ図 (器高・胴最大径/器高)

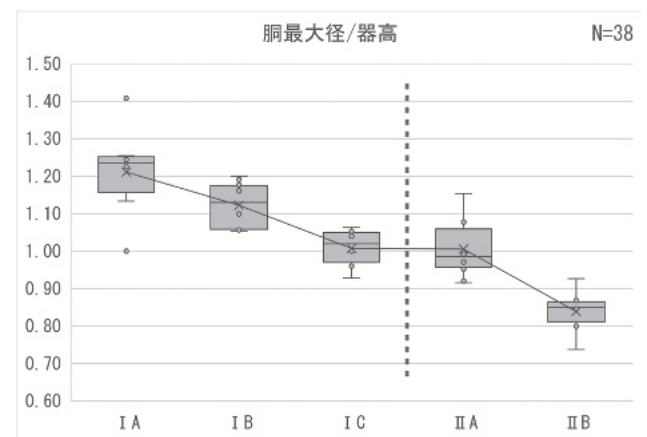
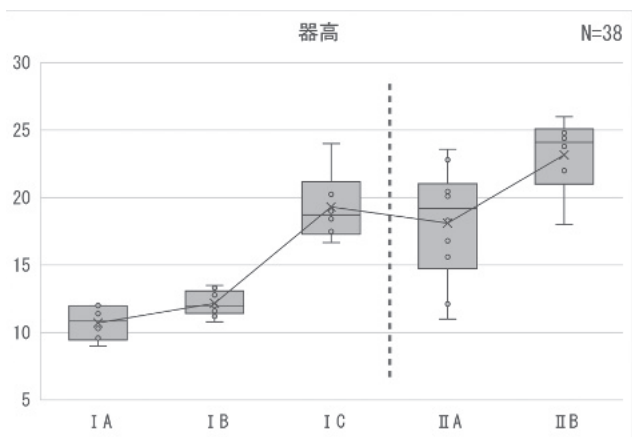


図8 平底長頸壺の箱ひげ図 (器高・胴最大径/器高)

明らかとなった。前述のように、「その他」型については独立した型式は設けていないが、これらの資料もまた楽浪平底壺の多様性を理解するうえで重要な資料群といえる。以下の展開では、主要型式を軸として全体の編年と展開を示しつつ、「その他」型に認められる時期的特徴についてもあわせて論じたい。今後、資

料の蓄積と新たな事例の追加は、型式区分の細分化および再整理のための根拠を与えることになる。

3. 楽浪平底壺の製作技法の検討

3-1. 検討の前提

楽浪土器を区分する際の最も基本的な基準は「胎

土]である。胎土を重視する視点は、関野貞の指摘(関野 1927)を嚆矢とし、谷(1984, 1985, 1986)や鄭仁盛(2002)をはじめとする後続研究に継承されている。こうした分類が器種区分を困難にするとの指摘(오영찬 2001)もあるが、胎土によって優勢となる器種や製作技法が異なる点は、楽浪土器の特徴として理解される。

この区分において、平底壺は精選された胎土で製作された「泥質系土器」(鄭仁盛 2002)が大半を占める。ただし、石英混入系など、以外の胎土で作られた平底壺も一部に認められる。これらは資料数がきわめて限定的であるうえ、泥質系平底壺とは一部異なる特徴を示すため、別途の検討を要する事例と評価される。したがって、本稿では泥質系平底壺を検討対象とする。

一方、胎土の採取と水簸の過程を経た後、楽浪土器の製作工程は、焼成以前まで大きく「成形」と「整形」の段階に区分できる。本稿では、これら成形・整形過程で現れる製作技法に着目して検討を進めたい。

3-2. 平底短頸壺

平底短頸壺で注目されるのは、胴部から頸部にかけて内外面に残る回転ナデ痕である。凹凸の程度には差があるものの、ほぼすべての資料で追加的な叩き工程を伴わず、回転ナデによって仕上げられている点が特徴的である(図9c, 図10c)。こうした仕上げの一貫性は、平底短頸壺の製作において回転台(轆轤)の使用が基本的であったことを示唆している。

前述したように、平底壺の基本的な成形方式としては、底部と胴部を接合したうえで、粘土帯を積み上げ成形していく方式が指摘されている。I A型の梧野里 20 号墳第 2 槨(図9-1とは別個体)、I C型の葛城里甲墳、II A型の古跡 22517、II C型の古跡 22504(図10-3f)、さらにII類の梧野里 21 号墳などでは、胴部最下位と底部外縁に接合痕が認められる例もある。これらの場合、底部円盤と胴部を結合させることによって成形が行われたと推定される。もっとも、粘土塊から一気に挽き上げる成形法も存在していたと推定される。この点は平底壺全体の成形方式を考えるうえで重要な論点となるため、後述する平底長頸壺の検討のなかであらためて総合的に述べることにしたい。

一方、平底短頸壺では、頸部の先端まで回転ナデが施されるため、多くの資料で頸部内外面に整然とした回転ナデ痕が観察されるが、その下部には叩き痕が一部認められる例もある。現時点での写真および実見資料を総合すると、叩き痕はI A型の梧野里 20 号墳第 2 槨(図9-1とは別個体)、I B型の石巖里 9 号墳(図9-2a)、II B型の石巖洞古墳(図10-2a)お

よび南井里 53 号墳で観察される。一次成形段階における叩き痕は、本来であれば後続する回転ナデによって消えやすいにもかかわらず、複数の型式にわたって残存している点が確認できる。

これは、鄭仁盛が検討した楽浪土器平底壺の製作技法(鄭仁盛 2002)を反映するものとして理解できる。すなわち、多くの場合、まず一次的に叩きによって器形を成形し、その後に回転ナデによって仕上げたものと推定される。ただし、叩き痕が認められず、頸部内外面に回転ナデのみが確認される資料も少なくない。これらは、叩き痕が後続の作業で消えた可能性を否定できないものの、異なる成形のあり方が存在した可能性についても考慮する必要がある。

底部外面には、楽浪土器に特有の特徴の一つである集線文の痕跡が観察される(図11)。これは、回転台から土器を分離する際に糸で底部を切り離した結果生じた「糸切り痕」である。静止状態で分離した直線～弧線状の静止糸切り痕(図9-2e・3e, 図10-1e・2e)と、回転状態で切り離された同心円状、あるいはそれに近い回転糸切り痕(図12-1c・2c・3c・4c・5c)の双方が確認される。そのうち回転糸切り痕は、静止糸切り痕と比べて確認例が少なく、先行研究でもその特徴が注目されてきた。

谷(1985)は、楽浪土城出土資料の検討結果として、土城資料では回転糸切り痕が確認されない一方、彩篋塚(南井里 116 号墳)では認められることから、これを搬入品あるいは例外的資料として解釈し得る可能性を示した。これに対し오영찬(2001)は、彩篋塚資料に加えて墳墓資料(本館 8562, 本館 8578)および智塔里土城資料の事例を挙げ、墳墓と生活遺跡の双方で出土することから、当時一般的に広く行われていた技法として理解した。さらに이나경(2022)は、後3世紀代にはより強い回転力を用いた平底壺の製作が行われていたとし、回転糸切り痕をその補助的な根拠として位置づけている。

本検討の結果、型式別の回転糸切り痕の採用比率は、II B型により集中する傾向がある点を指摘しておきたい。とりわけ、II B型に属する彩篋塚?(3点、図12-1・2・3)・本館 8562(図12-5)・本館 8578(図12-4)の資料は、器形・大きさ・製作痕などにおいて相互に近似した特徴を示しており、共通した製作伝統が想定される。平底長頸壺の一部(本館 14478 等)にも回転糸切り痕が認められるものの、平底壺全体としては静止糸切り痕が中心を占める傾向がみられる(図11)。

これを踏まえると、回転糸切り痕の採用傾向が示唆する点について注意を払う必要があるだろう。ただし、彩
















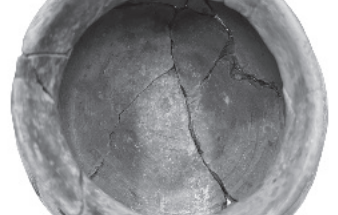


型式		平底短頸壺 I A	平底短頸壺 I B	平底短頸壺 I C
資料(遺構)		1 (梧野里20号墳2槨)	2 (石巖里9号墳)	3 (伝梧野里)
頸部	a			
	b			
全体	c			
胴下部	d			
底部	e			
	f			
所蔵機関		韓国/国立中央博物館	韓国/国立中央博物館	韓国/国立中央博物館

図9 平底短頸壺の製作技法 (1)


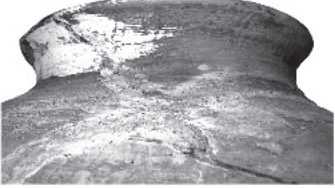
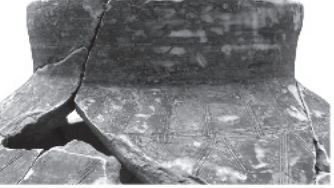








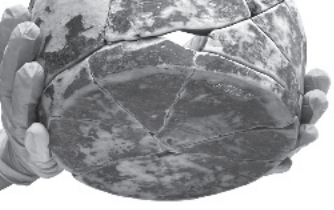
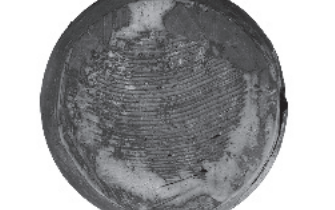

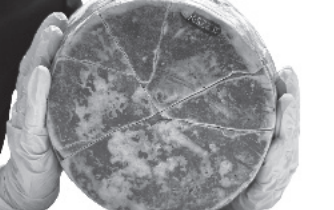

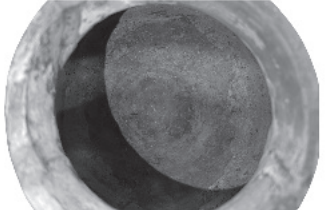
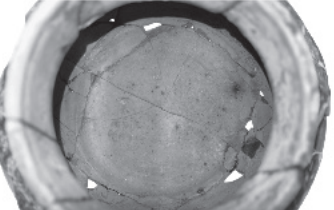
型式		平底短頸壺 II A	平底短頸壺 II B	平底短頸壺 II C
資料(遺構)		1 (石巖里205号墳)	2 (石巖洞古墳)	3 (古跡22504)
頸部	a			
	b			
全体	c			
胴下部	d			
底部	e			
	f			
所蔵機関		日本/東京大学考古学研究室	日本/東京大学建築学専攻	韓国/国立中央博物館

図10 平底短頸壺の製作技法(2)

篋塚出土品を除くと出土位置が不明な資料が多く、回転糸切り痕の時期的特徴を精密に論じるには限界がある。それでもなお、特定の型式において特定の製作技法が相対的に集中して認められるという状況は、従来十分に論じられてこなかった点でもある。今後は、より多くの資料の蓄積と出土情報の補完を通じて、製作

技法をめぐる多面的な関係を追究していく必要がある。

これと並んで、底部外縁～胴体下部には「ヘラ削り」が施される。これは多くの資料で頻繁に観察される特徴であり、主として胴下部と底外面に加えられ、その過程で糸切り痕が消される場合も多く認められる。成

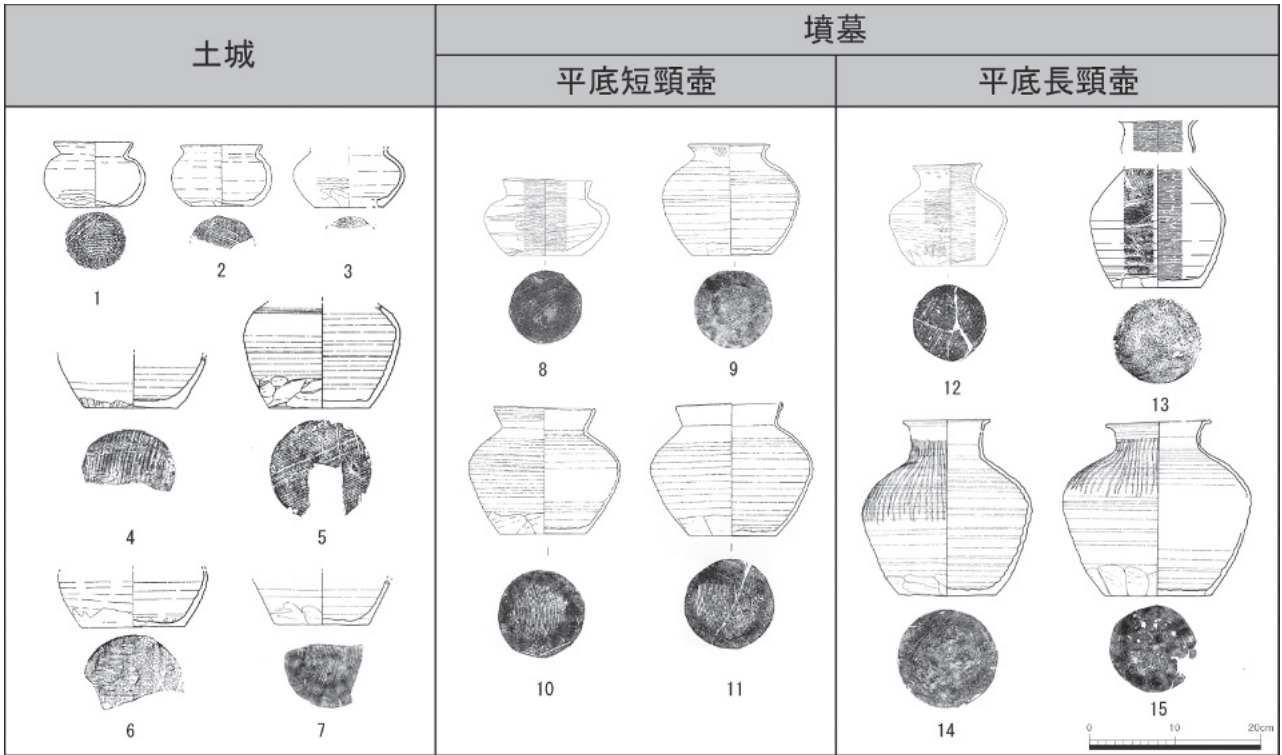


図11 平底壺の糸切り痕

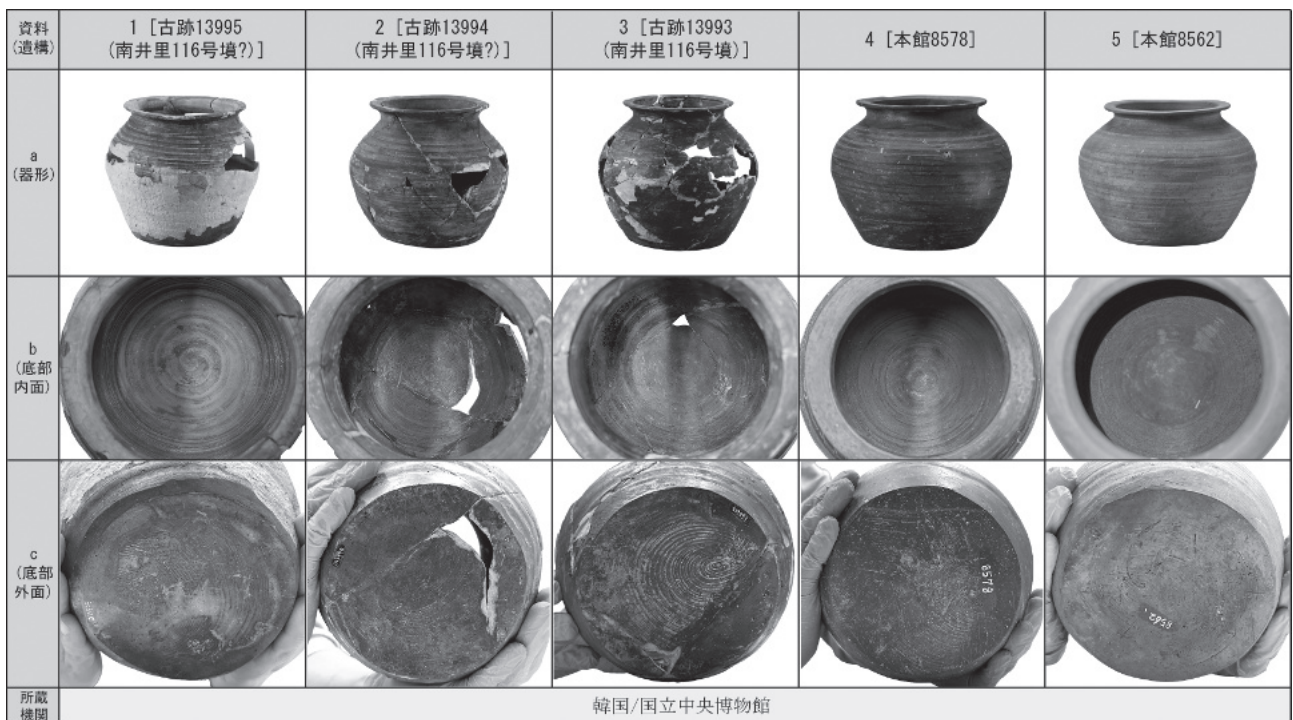


図12 平底短頸壺ⅡB型の回転糸切り痕

形が完了した後、土器を糸で切り離し、その厚さと均衡を整えるためにヘラ削りが加えられたものと考えられる。平底短頸壺 I A・I B 型では、胴部最下端を横方向に細長く削り取る事例（図 9-1d・2d；以下「ヘラ削り A」とする）がしばしば認められる。これに対し、I C 型および II 類全般では、胴下部および底部外縁において削り取りの方向や範囲に一定の幅がみられるものの、前者とは異なり、幅広く短く削る調整（図 9-3d, 図 10-1d・2d；以下「ヘラ削り B」とする）が行われる傾向が強い。

また、整形過程のなかで多様な装飾的効果が付与される点も認められる。平底短頸壺では胴体全面に回転ナデ痕が残るのが一般的だが、凹凸を意図的に強調した事例（図 10-1c・2d）も確認される。さらに、肩部への沈線や暗文の施文（図 10-3a）、器面に顔料もしくは漆とされる付着物（図 9-2, 図 10-1・3）や磨研など、装飾性を高める諸処理が多様に付加される点は、本器種の特徴の一つといえる。

3-3. 平底長頸壺

平底長頸壺においても、胴部から頸部にかけて内外面に残る回転ナデ痕が主要な特徴となる。すなわち、回転台（轆轤）を用いた製作が中心を成す点では、平底短頸壺と共通する性格を示す。また、成形方法については、先に触れたように、底部と胴部を結合したのち粘土帯を積み上げ成形と、粘土塊から高速回転によって一挙に立ち上げる方式の二つが示されている（오영찬 2001）。

氏は、後者の成形によって底部内面に手指の渦巻状の回転痕が残り、回転速度に応じて胴部の壁厚が薄くなると考えた。そして、この製作技法を平底短頸壺から平底長頸壺へと移行する時期に一般化したものとみた。これに対し、養洞里 3 号墳出土平底長頸壺（図 14-3）では、底部円盤との接合痕が確認されることから、楽浪後期においても粘土塊を一度に引き上げる製作技法が必ずしも普遍化していなかったとする見解（이나경 2013）もある。

筆者が多数の平底壺を実見した際、型式を問わず多くの資料で底部内面の螺旋状痕（図 9f, 図 10f, 図 12b, 図 13f, 図 14f）を確認することができた。とくに、前述の養洞里 3 号墳（図 14-3f）に加え、梧野里 25 号墳（II B 型；図 14-2f）出土品が注目される。これらは底部と胴体部に接合痕がみられるにもかかわらず、底部内面の螺旋状痕が明瞭に確認される。さらに、I A 型の石巖里 257 号墳（図 13-1a・1b）および古跡 22581、I B 型の本館 8550（図 13-2b）や伝梧野里などでは、底内面の螺旋状痕とともに、頸部の叩

き痕が回転ナデの下から観察される。

こうした製作痕が多様な型式に跨って観察される点からは、平底長頸壺が使用される時期においても、底部と胴部を接合する方法や、叩きによる一次成形が依然として採用されていたことを示している。ただし、粘土塊から引き上げて成形した可能性をもつ資料も認められるため、成形方式の併存関係についての可能性を開いておく必要があり、これを時期的な位置づけの中で展望する作業が求められる。

なお、底内面で観察される螺旋状痕については、その解釈をあらためて検討する必要がある。平底壺の底部円盤を製作する方法は、大きく、粘土を叩き伸ばす方式¹¹⁾と、轆轤の回転力を用いる方法とに大別できる。しかし、成形・整形の過程で底内面に回転を伴う作業が加えられる場合には、前者の方法が用いられていたかどうかを肉眼観察だけから判別することは困難である¹²⁾。したがって、現段階で明言し得るのは、楽浪平底壺の多くの資料で底内面に螺旋状痕が観察されるという事実を踏まえると、少なくとも底部円盤の製作工程における最終段階では、回転台の回転力を用いた作業が一般的であった可能性が示唆されるということである¹³⁾。

一方、全体器形の成形以後には土器を回転台から分離するための製法が加えられる。漆塗りや剥離によって観察が困難な場合もあるが、平底長頸壺においても底部外面には一般的に糸切り痕が認められる。多くの資料では、直線～弧線状の集線文痕（図 13-2e, 図 14-1e・2e）が確認されるが、一方で底部外縁ではヘラ削り調整によって糸切り痕が消されている場合も少なくない。

こうしたヘラ削りは、底部外縁に限らず胴部下位にも施される。平底長頸壺 I 類では、胴部下位にやや不規則な削りが加えられた例（図 13-1d・2d）が認められ、II 類では、胴部最下端から底部外縁にかけて均一で整然とした削りが施された例（図 14-2d）が確認される。さらに、整形調整として回転ナデによる凹凸痕を強調する手法（図 14-1d・2d・3c）、あるいは沈線や暗文（図 14-1a・2a）、顔料または漆による塗り（図 13-1・3, 図 14-1）、磨研を加えるなど、装飾的効果を伴う事例も幅広く知られる点が特徴である。

3-4. 小結

以上、平底壺において観察される主要な製作技法をまとめると、胴体部内外面の回転ナデ、底部外面の糸切り痕、内面の螺旋状痕、さらに底部外縁から胴体下部にかけて施されるヘラ削り調整が共通して採用され

型式		平底長頸壺 I A	平底長頸壺 I B	平底長頸壺 I C
資料(遺構)		1 (石巖里257号墳)	2 (本館8550)	3 (貞柏里127号墳)
頸部	a			
	b			
全体	c			
胴下部	d			
底部	e			
	f			—
所蔵機関		韓国/国立中央博物館	韓国/国立中央博物館	韓国/国立中央博物館

図13 平底長頸壺の製作技法(1)

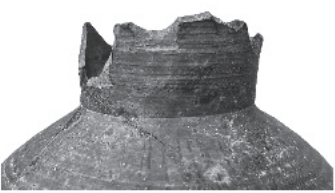

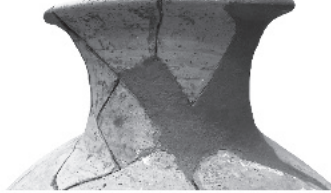







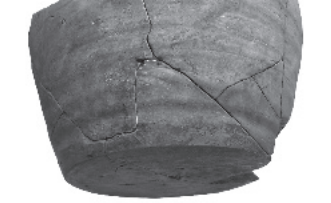



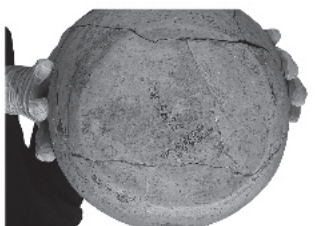
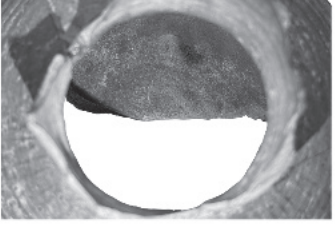
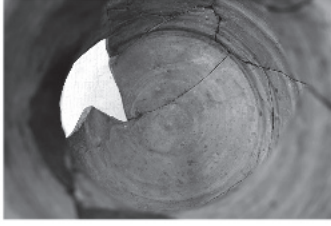
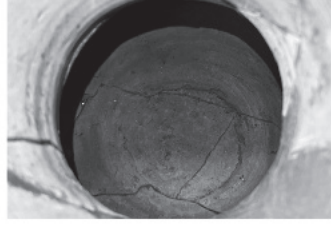
型式		平底長頸壺ⅡA	平底長頸壺ⅡB	その他
資料(遺構)		1 (本館8556)	2 (梧野里25号墳)	3 (養洞里3号墳)
頸部	a			
	b			
全体	c			
	d			
底部	e			
	f			
所蔵機関		韓国/国立中央博物館	韓国/国立中央博物館	韓国/国立中央博物館

図14 平底長頸壺の製作技法(2)

ている点が指摘できる。これらの要素がすべての資料に一樣にみられるわけではないものの、平底短頸壺・平底長頸壺を通して確認される製作技法的要素の強い関連性は、製作技法における定型性の高さを示唆する。しかし、こうした製作技法の時期的位置については、従来十分に検討されてこなかった。これは、平底壺を構成する製作技法的要素の時間的な位置づけを多面的に把握し、そこに反映された楽浪土器の製作技術の変化を考察するための手がかりとなると考えられる。

4. 楽浪平底壺の編年と展開

楽浪平底壺の編年は、墳墓出土品を対象として行う。楽浪墳墓にはさまざまな副葬品が納められており、その中でも銅鏡や紀年銘資料など、絶対年代の推定に資する遺物を比較的豊富に副葬することから、安定した編年体系を構築する上で適した資料群といえる。本研究では、既存資料に加え、未検討・新資料についても、まず出土地の確認・比定を行い、そのうえで共伴遺物および墳墓形式との対応関係など、年代比定に関わる諸条件を総合的に吟味することにより、各

資料の絶対年代範囲を判断した。ただし、薄葬化の傾向が認められる埴室墓段階に属する一部の資料については、細部の年代を設定する過程において、高久の編年案（2009）を参照した。

こうした年代比定の過程を通じて、本稿では楽浪平底壺の編年を、前1世紀後半、後1世紀、後2世紀、後3世紀以降の四段階に大別した。編年に用いた主要資料については、共伴遺物および墳墓形式を表1に整理し、各資料の年代的位置を示した。前1世紀後半には、共伴遺物では異体字銘帯鏡、車馬具（車軸頭、蓋弓帽）など、墳墓では単葬木槨墓および同穴合葬木槨墓が中心である。後1世紀代には前の時期の遺物・墓制が継続する一方で、方格規矩四神鏡、内行花文鏡、鉄長剣、金属容器、車馬具、同穴合葬木槨墓が中心をなし、遅い時期には獣帯鏡と埴併用木槨墓（高久2009）が確認される特徴を示す。後2世紀も前の特徴が継承されるが、全般的に共伴遺物が減少する傾向を示し、環頭刀などが一部確認される一方で、内行花文鏡、盤龍鏡、埴室墓（一室・二室）が主流をなす。2世紀後葉後半を含む3世紀代にかけては、鉄製武器（環頭刀）および明器（車馬具）などとともに、獣帯鏡・

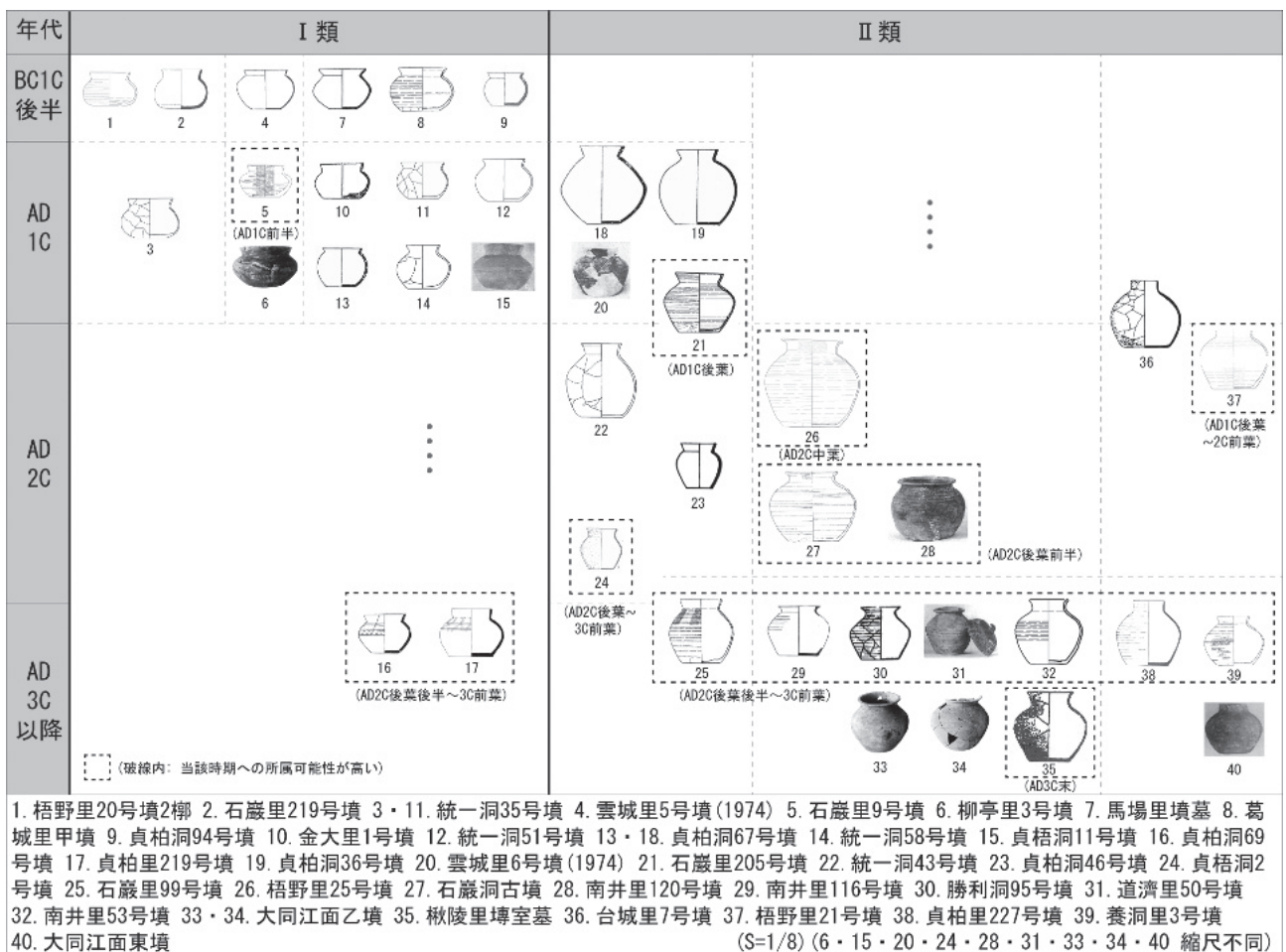


図15 楽浪墳墓出土の平底短頸壺の展開

半円方形帯神獸鏡・鉄鏡が確認される。木室墓のような特殊な墓制もみられるが、依然として埴室墓が中心的な特徴を示す。

また、時期をより詳細に比定し得る資料については、図15・16において点線により別途表示した。以上の編年手続きに基づき、本稿では楽浪平底壺の器種別展開について検討を行う。こうした手続きは、時期ごとの型式変遷や共存関係をより確実に復元し得る点に意義があり、本稿では、こうした手順を通じて楽浪平底壺の器種ごとの展開を改めて示すことを目指す¹⁴⁾。

4-1. 楽浪平底短頸壺の編年と展開

4-1-1. 型式の時期的展開

平底短頸壺の展開を見ると(図15)、基本的にはI類からII類へと推移する傾向が認められる。現在のところ、平底短頸壺の副葬が確認できる最も早い時期は前1世紀後半である。この時期には、器高が低く、器高に対して胴最大径が大きいI類が集中することが特徴であり、頸部は一部に直立する例もみられるものの、概して直線的に外反する形態が一般的である。全体の器形や規模においては類似性を示すが、胴最大径の位置およびそれに伴う胴部形態に関しては、IA～C型にわたる多様な型式が併存している。

各型式は、その存続期間において比重の差が認められる。IA・IB型は、前1世紀後半～後1世紀を中心に確認され(図15-1～6)、このうちIA型は前1世紀後半、IB型は後1世紀に比較的集中し、いずれも概して早い時期に副葬される傾向を示す。他方、IC型は前1世紀後半を起点として後1世紀代にも多く認められ(図15-7～15)、その後は比重が減少するものの、長頸化や文様の付加などを伴いながら、後3世紀代に至るまで副葬例が確認される(図15-16・17)。

後1世紀には、I類の流行と並行して、器高が次第に高くなるII類が出現する。器高は上昇するものの頸部が狭い例など、移行期に特有の多様な形態が認められる一方(図15-18・19)、器高が高まり頸部が広がる典型的なIIA型(図15-20・21)も確認される。IIB・IIC型については、その出現時期が遡る可能性を否定できないが、現段階では、後2世紀前後以降にII類の各型式が本格的に姿を現すと考えられる。その過程では、一方向的な変化というよりも、複数の型式が併存しつつ多様化していく展開を示す点が特徴的である。

そのなかでも、後2世紀代には、器高の上昇と大型化を背景として、頸部が直線的に外反するIIA型(図

15-22・23・24)と、曲線的に外反するIIB型(図15-26・27・28)が主要な軸を成す。後3世紀へと移行する過程では、IIA型が減少し、IIB型が増加する変化が認められ、IIB型が後3世紀以降の主流型式を占めるに至る(図15-24・25・29～35)。時期が下るほど、IIA型では頸部幅の広い例が多い一方、IIB型では頸部幅が相対的に狭まる傾向も看取される(図15-30～35)。頸部が直立するIIC型は、前二者と比較して量的には多くないものの、後3世紀代に出土例の増加が見られ、平底短頸壺II類の一翼を担う型式となる(図15-36～40)。

4-1-2. 製作技法の時期的所在

次に、前述した変遷を踏まえ、平底短頸壺の製作技法上の特徴を検討する。まず、底部調整の方法において注目されるのは、型式に応じて中心的に採用される技法に差異が認められる点である。前1世紀後半のIA型では、胴部最下端が屈曲する例(図15-2)や、底部内面中央が持ち上がる例(図15-1)が多く、他の型式と比べて底部が平坦でない傾向が認められる。そして、これらには共通して胴部最下端を横方向に長く削り出すヘラ削りAが施されている。

また、平底壺の主要な製作痕の一つである糸切り痕が明瞭に認められない例も確認される。調整加工などによって痕跡が消失した可能性を否定することはできないが、他の資料では頻りに観察される点を考慮すれば、特筆すべき現象として理解されよう。糸切り痕の判別が困難な例(図15-6)や、胴部最下端が屈曲する例(図15-5)は、後1世紀代のIB型にもみられる。ところが、石巖里9号墳出土のIB型(図15-5)では、胴部最下端にヘラ削りAが施される一方で、底部外面に糸切り痕が認められ、先の資料とは異なり、平坦な底部が形成されている点が特徴的である。

これと比較すると、IIC型では、前1世紀後半の葛城里甲墳(図15-8)においてすでに短く広いヘラ削り調整(ヘラ削りB)が確認される。後1世紀にも同様の調整が施され(図15-14)、これに糸切り調整が併存する事例も認められる。このような特徴を備えるIIC型では、より安定した底部が形成される例が多い。後続するII類では、多くの資料において底部が平坦となり、胴部へと続く角度が直線的な形態を示す。また、底部中央の糸切り痕、底部外縁の削り痕、さらに胴部下端のヘラ削りBが主として採用されるという特徴が認められる。

こうした製作技法の組み合わせをそのまま示すのが、後1世紀後葉の石巖里205号墳出土の平底短頸壺

2点である(図15-21)。さらに、後2世紀代の梧野里21号墳(図15-37)、後2世紀中葉の梧野里25号墳(図15-26)、後2世紀後葉の石巖洞古墳(図15-27)、後2世紀末～3世紀前葉の石巖里99号墳(図15-25)、南亭里116号墳(図15-29)などにも同様の特徴が確認される。これらの事例からは、I C型において定型化した製作技法上の特徴がII類においても引き継がれ、長期にわたって採用されただけでなく、II類を製作する上での主要な方式として位置づけられていた可能性が示唆される。

一方、3章では平底壺の諸成形法とその変遷に関する議論に触れたが、実際の様相を明らかにするためには、製作技法上の特徴を時期別に追跡する作業が必要となる。成形法の推定に資する主要な製作痕としては、粘土帯の接合痕、底部内面の螺旋状回転痕、底部と胴部の接合痕、頸部内外面の叩き痕、底部および胴部の壁厚などが挙げられる。基本的に平底短頸壺では、回転ナデがより整い、さらに暗文や文様の施文、あるいは漆塗りや磨研が加えられることで、装飾性が高まる傾向が認められる。

ただし、底部内面の渦巻状の回転痕は、凹凸の程度に差こそあれ、型式や時期を問わず多くの資料に観察される。すなわち、出現以降、長期にわたって確認される製作痕であるといえよう。また、成形法を直接示す指標となる底部と胴部の接合痕は、前1世紀後半の梧野里20号墳第2槨(I A型; 図15-1)、葛城里甲墳(I C型; 図15-8)、後1世紀前半の石巖里9号墳(I B型; 図15-5)、後2世紀代の梧野里21号墳(II C型? ; 図15-37)、さらには後3世紀以降の養洞里3号墳(II C型; 図15-39)など、各時期の資料に認められる。

頸部内外面の叩き痕は、後行する回転ナデによって消され得るにもかかわらず、前1世紀後半の梧野里20号墳第2槨(I A型; 図15-1)、後1世紀の石巖里9号墳(I B型; 図15-5)および柳亭里3号墳(I B型; 図15-6)、後2世紀後葉の石巖洞古墳(II B型; 図15-27)、後2世紀後葉後半以降の南井里53号墳(II B型; 図15-32)や大同江面乙墳(II B型; 図15-34)など、多様な時期の資料において確認される。すなわち、出現以降の広い時期にわたり、I類・II類の複数の型式で認められるこれらの製作痕跡は、底部円盤と胴部の接合方法、そして叩きを加える成形方式が長期にわたって継続していたことを示している。

ただし、実見資料のなかには、底部と胴部の接合面がやや厚く、胴部へ向かうにつれて壁厚が減じる例があり、底部円盤との接合痕も肉眼では判然としないも

のが認められる。これらの例については、粘土塊を一挙に引き上げて成形した方式が採用された可能性を考慮する必要がある。該当資料が遅い時期に集中する点から、この方式の比重が増した可能性も否定できないが、少なくとも平底長頸壺の成立以降においても、複数の成形法が併存していた事実は指摘し得る。

したがって、平底短頸壺の編年と展開を全体的に復元することで、具体的な形態的・製作技法的变化が明瞭となった。全体としては、器高の上昇と大きさの大型化が進み、I類からII類への移行という大きな流れが把握される一方、細部に目を向ければ複数の型式が併存し、とりわけII類では多様な型式が並行して展開する様相が認められる。




































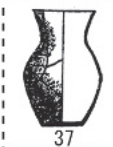
さらに、胴部内外面の回転ナデ、底部内面の螺旋状回転痕、底部外面の糸切り痕、底部外縁～胴最下部にかけてのヘラ削り痕といった標識的な製作技法要素は、初期資料を経て組み合わせられ、早い段階において一定の定型化が進んでいたことがうかがわれる。これらの技法は長期にわたり継続的に用いられ、平底短頸壺製作の基本的な技術的基盤を構成していたと考えられる。

4-2. 平底長頸壺の編年と展開

4-2-1. 型式の時期的展開

楽浪平底長頸壺において変化が最も顕著に認められる属性は、頸部の高さや形態であり、平底短頸壺と同様に、I類からII類へと移行していく過程が確認される(図16)。現在までに知られる最も早い時期の副葬例は前1世紀後半に位置づけられ(図16-1)、頸部がやや直線的に外反し、器高が低く、胴最大径が胴中に位置するI A型が認められる。従来は、出土位置の確認が可能な資料にもとづき、平底長頸壺の上限を後1世紀代に置き、遡る可能性が指摘されてきた(정재현 2022)。しかし、近年の検討(이나경 2022)により、前1世紀後半に平底長頸壺に属する資料の出土位置が明らかとなり(古蹟22362=石巖里257号墳)、新たな時期的様相が示されることとなった。

もっとも、このような器形は平底短頸壺と比較すると、頸部が細長くなり、胴最大径が胴中上位に位置する平底長頸壺の典型的形態とは一定の差異を示す。該当土器は平底長頸壺の出現期資料として評価されると同時に、先に散布図(図3)で示した二器種の中間的領域に位置する例でもある。これは、出現期の平底長頸壺(I A型)と平底短頸壺I類が共有する器形的類似性を示唆するものであろう。これらが時期的にも近接している点を踏まえるならば、本資料は両器種の出現背景および分化過程を解明するうえで重要な手がか

年代	I 類	II 類	その他
BC1C 後半			
AD 1C	 	  (AD1C前半)	 (AD1C前半)
	   	    (AD1C中葉?)	
	 (AD1C後葉~2C前葉)	  (AD1C後葉)	 
AD 2C	 (AD2C前葉) 	  (AD2C後葉~3C前葉)	 (AD2C中葉)  (AD2C後葉)  (AD2C後半) 
AD 3C 以降	⋮	  ⋮    (AD2C後葉後半~3C前葉) ⋮	  (AD3C末)

(破線内: 当該時期への所属可能性が高い)

1. 石巖里257号墳 2. 貞柏洞49号墳 3. 統一洞85号墳 4・33. 石巖里9号墳 5. 貞梧洞1号墳 6. 統一洞52号墳
7. 金大里1号墳 8. 統一洞58号墳 9. 貞梧洞3号墳 10. 梧野里21号墳 11. 伏獅里1号墳 12. 貞梧洞10号墳 13. 雲城里3号墳(1983) 14. 貞柏里127号墳 15. 貞柏里8号墳 16・20・21. 石巖里205号墳 17. 石巖里6号墳 18. 統一洞84号墳 19. 順川里墳墓 22. 貞梧洞8号墳 23. 貞梧洞2号墳 24. 貞柏里151号墳 25. 大同江面乙墳 26. 梧野里25号墳 27. 貞柏里221号墳 28・35. 石巖里218号墳 29. 勝利洞95号墳 30. 貞柏里227号墳 31. 前進洞2号墳
32. 石巖里219号墳 34. 貞柏里13号墳 36. 養洞里3号墳 37. 楸陵里埧室墓
(S=1/10) (1・5・9・12・14・22・25・30 縮尺不同)

図16 楽浪墳墓出土の平底長頸壺の展開

りとなり得る。一方、他の型式についても新資料によって登場時点が遡る可能性は否定できないが、現段階で安定した資料として確認できるのはI A型である。この時期には平底長頸壺の数量そのものが多くなく、前1世紀後半にすでに多型式のI類が確認される平底短頸壺とは異なる様相を示している。

平底長頸壺の典型性が明確に示されるのは後1世紀であり、この時期に平底長頸壺の出土が大きく増加する傾向が認められる。まず、I B型・I C型、さらにはII A型に至る多様な型式が出現する。I A型(図

16-2・3)は少量ながら継続し、器高が低いものの胴最大径が胴上位に位置するI B型(図16-4~9)、および胴最大径は胴上位に位置しつつ器高が高くなるI C型(図16-11~16)が中心を構成する。I B型とI C型は後2世紀(図16-10・17・18)にも確認され、一部のI類については、より遅い時期まで存続した可能性も否定できない。しかし、現段階での安定した出土状況からみれば、I類は後1世紀を中心に流行した点が認められる。

I類の増減と交差しつつ、後1世紀を経て後2~3

世紀の主流を占めるのがⅡ類である。Ⅱ類では、頸部が直立あるいは直立気味に外反しつつ、口縁部で外反する変化がみられ、全体として器高が増大するなかでⅡA型が出現する。こうした変化は、平底長頸壺4点が副葬された王冢墓（石巖里205号墳；図16-16・20・21）において顕著である。これらの資料は、胴最大径が上位に位置し器高が高まる点で共通する一方、頸部形態に多様性が認められる。段階的に頸部が直線的に外反する器形（図16-16）から、頸部が直立した後に口縁部が外反する器形（図16-20・21）に至るまで、ⅠC型からⅡA型にかけて多様な資料が併存する様相が認められる。

六角形の胴部に肩部の稜線が発達するⅡA型は、後1世紀にすでに出現する（図16-19）が、後1世紀後葉を経るなかで（図16-20・21）出土量が増加する。そして後2～3世紀を通じて一角を占めるようになり（図16-22～25）、時期が下るにつれて頸部が長くなり、口縁部が次第にラップ状へと変化していく傾向が認められる。これに対し、緩やかな長胴形の胴部を示すⅡB型は、やや遅れる後2世紀代に出土例（図16-26・27・28）が確認される。ただし、後2世紀後葉～3世紀代には、器高に対して頸部がより高くなる変化を伴いながら量的にも多くの資料が認められ、この時期の中心的型式を成す（図16-29・30・31）。養洞里3号墳（図16-36）¹⁵⁾出土の平底長頸壺においても、この時期に流行した頸部形態がよく示されている。後3世紀末、最終段階に相当する楸陵里塚室墓の平底長頸壺（図16-37）においても、全体的な器形の差異はあるものの、前時期に比べ頸部が大きく誇張された例が認められる点が特徴的である。

4-2-2. 製作技法の時期的位置

このような変遷をふまえて製作技法上の特徴を見ると、基本的には時期が下るにつれて回転ナデがより整然となり、それに伴って胴部の凹凸の強調、暗文・沈線の施文、漆塗りや磨研の付加など、装飾性が高まる変化が認められる。これは平底短頸壺においても共通して認められる傾向であるが、それとは異なる点も存在する。とくに底部調整の方法が注目される。出現期資料にあたるⅠA型の石巖里257号墳（図16-1）では、(1) 胴部最下端を広く短く反復してヘラ削り調整（ヘラ削りB）は認められるものの、(2) 底外面では糸切り痕が明瞭には観察されない。

ヘラ削りBによる調整は、前1世紀後半の石巖里257号墳のほか、後1世紀代の貞柏洞49号墳（ⅠA型；図16-2）、石巖里9号墳・統一洞52号墳・統一洞58号墳（いずれもⅠB型；図16-4・6・8）な

どにおいても観察される。その後、後1世紀後葉の石巖里205号墳（ⅠC型・ⅡA型；図16-16・21）、後2世紀中葉の梧野里25号墳（ⅡB型；図16-26）、後3世紀前葉の貞柏里227号墳（ⅡB型；図16-30）および養洞里3号墳（その他；図16-36）において確認されている。

このように、平底長頸壺では、出現期から比較的遅い時期にかけて、胴下部を広く短く反復してヘラ削り調整するヘラ削りBが安定して採用されていたことが認められる。これは、平底短頸壺の初現期資料の一部では胴部最下端を狭く長く削るヘラ削りAが観察される点と対照的である。とくに後1世紀前半の石巖里9号墳では平底短頸壺が共伴しており、平底長頸壺（図16-4）にはヘラ削りBが、平底短頸壺（図15-5）にはヘラ削りAが採用されている点が注目される。

すなわち、平底長頸壺は平底短頸壺と比べて、特定のヘラ削り調整が早い時期から意図的に用いられていた可能性が考えられる。平底短頸壺初期の資料を除けば、その後に観察される平底壺の多くにおいてはヘラ削りBが採用されている。平底壺全体がⅠ類からⅡ類へと移行する過程で器高が高くなっていく点をふまえるならば（図7、図8）、このようなヘラ削り調整は、楽浪平底壺における全体的な器形変化と関連しつつ、一般的な底部調整法として定着していったものと考えられる。

一方、糸切り調整については、石巖里257号墳（ⅠA型）において糸切り痕の観察が困難であることをすでに指摘した。その他の調整によって消された可能性もあるが、器形・大きさ・色調などが石巖里257号墳出土品とかなり類似する古跡22581（ⅠA型）においても、胴下部のヘラ削り調整、頸部の叩き痕、胴中位の凹凸痕、底内面の回転痕などは観察されるものの、底外面の糸切り痕は明瞭には認められない。このことは、土器を取り外す方法として糸切り調整が採用されなかった可能性を示唆しており、糸切りが行われていたとしても、その痕跡を残さない点において、定型化した糸切り調整とは異なる様相を示すと考えられる。

この差異は後1世紀前半、ⅠB型の石巖里9号墳（図16-4）において明瞭にあらわれる。胴下部ではヘラ削りBが施される点で共通するが、底外面では鮮明な静止糸切り痕が観察される点で異なる。このような組み合わせは、石巖里9号墳出土品と器形的にきわめて近似する本館8550（ⅠB型；図13-2d・2e）をはじめ、後1世紀後葉の石巖里205号（ⅡA型）、貞柏里13号墳（図16-34）、後2世紀中葉の梧野里25号墳（ⅡB型；図16-26）、後2世紀末～3世紀前葉の貞柏里151号墳（ⅡA型；図16-24）などにおい

でも同様に確認されており、このような製作技法が継続的に用いられていた可能性がうかがわれる。

すなわち、平底長頸壺の底部調整方式は、平底短頸壺と比較すると、胴下部においては前1世紀後半の出現期からすでにヘラ削りBが確認される点に特徴が認められる。一方、底部における糸切り調整は、出現以降の後1世紀から安定して認められ、比較的短期間のうちに製法の採用と拡散していったことが確認される。そして、このような組み合わせがその後の資料においても継続して確認されることから、平底短頸壺と比べて、製作技法上の諸要素が、より早くで定型化した方式として定着していったことを示唆する。

一方、成形方法については、第3章において既に、底部内面の螺旋状の回転痕、底部と胴部の接合痕、頸部の叩き痕などが、平底長頸壺の多様な型式において確認されることを明らかにした。それにもとづき、平底長頸壺の出現以後にも複数の成形方法が共存していた可能性を示したが、これらの製作技法の時的的位置をより具体的に示すことができれば、その期間についてもある程度の推定が可能になると考えられる。

螺旋状痕は、出現期にあたるIA型の石巖里257号墳(図16-1)から、後2世紀後葉後半以降の養洞里3号墳(図16-36)に至るまで、型式や時期を問わず広く観察される。事実上、平底長頸壺をはじめ平底壺全般に認められ、一般的な底部円盤の製作技法として定着していたことがうかがわれる。この点は、前述したように、成形方法を直接的に推定しうる具体的な製作痕というよりも、回転台(轆轤)の使用を示す痕跡として理解される。

前述した頸部内外面の叩き痕は、属する石巖里257号墳(IA型;図16-1)、前1世紀後半の出現期から確認される。それ以外の資料については、出土位置が不明瞭であるため時的的位置づけは困難であるが、石巖里257号墳出土品と類似する古跡22581(IA型)、石巖里9号墳出土品と近似する本館8550(IB型)、梧野里25号墳出土品ときわめて近い特徴を有する伝梧野里資料(II B型)など、ほぼ同様の性格を示す資料群を挙げることができる。平底長頸壺の展開において各型式の中心時期が想定されることを踏まえると、少なくともII類が登場したのちの段階においても、当該製作技法が継続して採用されていたことがわかる。

底部と胴部の接合痕についても、前述した資料の時期を見てみると、後2世紀中葉の梧野里25号墳(2点ともII B型;図14-2, 図16-26)および後2世紀末~3世紀前葉の養洞里3号墳(その他;図16-36)で確認されている。とくに、後2~3世紀においても接合痕が認められることは、この種の成形方式が

遅い時期まで用いられていたことを示している。ただし、平底短頸壺と比べる観察される頻度はやや低い印象がある。

一方で、底部の接合痕や頸部内外面の叩き痕が肉眼では確認されず、胴部の器壁がきわめて薄く、さらに観察が可能な一部資料の断面においても粘土帯の接合痕が認められないものについては、粘土塊から直接器形を挽き出す成形方式が採用されていた可能性があると考えられる。これまでのところ、この種の資料は比較的新しい時期に属する印象がある。また、従来は検討されてこなかったが、底内面の平坦さの程度も注目される点であり、中央と外縁で厚さの差や凹凸の度合いに差異がみられる事例が確認される。先の製作痕が水挽きの成形方式と関わるかどうかについては、前述したような科学的分析を併用しつつ、製作技法上および時期上の特徴を具体化していく必要があると考えられる。

このように平底長頸壺の編年と展開を検討することにより、形態的・製作技法的な変遷を把握した。相対的には、時期ごとに特定の型式が集中する傾向が顕著である一方で、複数の型式が併存する様相もまた認められる。すなわち、全体としては比重の差をともないつつI類からII類へと移行していく過程が認められ、これが平底長頸壺の展開であるといえる。

製作方式に関しては、出現期を過ぎた段階では、胴部内外面の回転ナデによる凹凸痕、底外面の糸切り痕、胴下部~底部にかけてのヘラ削り調整といった共通の要素が安定して定着し、一貫して認められるようになる。これは、平底短頸壺と比較した場合、製作技法上の諸要素がより早い定着し、平底長頸壺を製作する定型的な方式として普遍化していったことを示していると考えられる。

5. 結び

本稿では、未検討・報告資料および新資料を含む基礎資料の再検討にもとづき、楽浪平底壺の分類・製作技法・編年について議論を行った。分類においては、従来曖昧であった範疇を、定量的指標と形態的基準によって再整備し、器種区分を明確化するとともに型式設定を試みた。これを踏まえ、平底壺の製作技法を精査することで、器種および型式ごとの普遍性と特異性を明らかにすることができた。最後に、全資料について副葬品および墳墓形式を基準として編年の位置を比定し、従来の研究では不明確であった平底短頸壺と平底長頸壺の時的展開を、より具体的に復元することができた。

これらの結果は、平底壺が前1世紀後半に登場した

のち、楽浪郡存続期を通して継続的に副葬されていた点を踏まえると、楽浪土器全体の編年整備に資する意義を有している。また、平底壺は日韓両地域において広範に確認される器種である。本検討は、両地域への平底壺の流入時期をより細かく推定するうえで有用であるだけでなく、形態観察および分類の結果から地域ごとの搬入様相の差異を把握することにより、各地域単位の交流のあり方やその性格を具体的に理解する上でも一定の寄与をなし得ると考える。

一方、本検討を通じて浮かび上がった課題も少なくない。まず、器種区分で明らかになったように(図3)、平底短頸壺と平底長頸壺それぞれの群集のあいだで、相互に近接した位置を占める資料群が確認された。ここでは便宜的に、これらを「中間な資料群」と呼んでおきたい。この資料群をめぐる関係は、従来の個別的な検討にとどまらず、器種間の相互的な展開のなかで理解する必要があることを示唆している。今後、形態的特徴だけでなく時期的な位置づけも含めて検討を進めていくことによって、両器種の展開過程と相互関係を展望するための手がかりが得られるものと期待される。

また、平底壺の出現が前1世紀後半であることは、「平底」を可能にした糸切り調整技法の採用とも密接に関わる。今後は、こうした製作技法の導入および普及をめぐる社会的・技術的背景を、時期的位置の中でより精密に論じていく必要がある。あわせて、平底壺という新たな器種が出現するに至った背景、さらには各器種がいかなる相互関係のもとで分化していったのかについての検討も求められる。これらの議論は、平底壺における器種および型式間の関係をより明確に整理する方向の中で、具体化していくものと考えられる。

しかし、現段階の研究にもなお限界が存在する。墳墓出土品については、写真および実物による観察が可能であるものの、明確な出土位置を把握し難い未報告資料も多い。そのため、出土位置の継続的な検討を通じて、編年研究に活用し得る資料を拡充していく必要がある。また、図面・図版資料や計測値といった基礎データの不均衡も、解消すべき課題として残されており、これは平底壺のみならず、楽浪土器全般に共通して認められる問題といえる。未報告資料の整備および図面化作業は、今後も継続して求められる。

今後は、資料の拡大と蓄積を踏まえ、より精緻な分類体系の再構築を図るとともに、高句麗および中国系の平底壺との比較を通じて、東アジア土器文化の中における楽浪平底壺の時空間的位置を明らかにしていきたい。

謝辞

本稿は、2022年度に釜山大学大学院考古学科へ提出した修士学位論文「日本列島出土楽浪土器研究」(정재현 2022) 第Ⅲ章第4節第1項第4・5目を基礎とし、その後得られた研究成果を踏まえて、大幅な修正・加筆を施し、再構成したものである。

本研究の遂行にあたっては、指導教員である根岸洋先生をはじめ、福田正宏先生、森先一貴先生、新井才二先生より、多くのご指導ならびに貴重なご助言を賜った。また、谷豊信先生、鄭仁盛先生のご研究より多くの示唆を得たほか、本論文の基礎となった修士学位論文の執筆に際しては、釜山大学の在学時の指導教員である李昌熙先生より多大なるご指導を賜った。

さらに、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵の楽浪土器資料については、早乙女雅博先生より、資料の取り扱いおよび解釈に関して多くのご教示を賜った。

本研究に必要な資料調査および研究経費の一部は、「東京大学フェロウシップ」の支援を受けて実施された。また、下記諸機関に所蔵される楽浪平底壺を対象とした実見調査ならびに写真・図面資料の検討を基礎としている。資料の利用を許可いただき、調査に際して多大なご協力を賜った各機関の関係各位に、あらためて厚く御礼申し上げる。

- ・ 국립중앙박물관
 - ・ 서울대학교박물관
 - ・ 東京国立博物館
 - ・ 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
 - ・ 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室
 - ・ 東洋文庫 (TOYO BUNKO)
- (敬称略・日本所在機関は五十音順)

註

- 1) 韓国考古学では「楽浪古墳」という用語が一般的に用いられるが、日本考古学では「楽浪墳墓」が広く使用されている。本稿では日本側の用例に従い「墳墓」を用いるが、遺跡名に「古墳」を含む場合には原称をそのまま踏襲する。
- 2) 「広口短頸壺」と対照される一群としての「壺」を指し、具体的には、頸部が比較的長く立ち上がり、器高/口縁径比が約1.3以上となる個体を意味する。
- 3) 本稿で用いる「韓半島」は、日本の学界で用いられる「朝鮮半島」と同一の空間的範囲を指す概念である。
- 4) 韓国学界では当該地域を一般に「西北韓」または「西北韓地域」と称することが多い。しかし、楽浪郡および帯方郡の範囲は時期によって変動があったものと理解されており、その具体的な領域を確定することは困難である。したがって、本稿で用いる「(韓半島) 西北地域」は、現平壤一帯を中心として、楽浪郡および帯方郡に関連する主要遺

跡の分布が認められる周辺地域を含む地理的概念として限定的に用いるものである。

- 5) 本稿で用いる「北韓」は、「朝鮮民主主義人民共和国」を指す韓国の学界における一般的表現であり、日本の学界で用いられる「北朝鮮」と同一の空間的範囲を意味する。
- 6) 樂浪郡並行期の土城としては複数の遺跡が指摘されているものの、正式な発掘調査および報告が行われた例は稀少である（鄭仁盛 2014）。ここでいう土城資料は、平底壺の実物観察を行った樂浪土城を中心に、智塔里土城の資料を一部含んでいる。
- 7) 韓国の国立博物館では、「文化遺産標準管理システム」に基づいて遺物の登録・管理が行われている。このうち樂浪遺物の大半は、朝鮮總督府博物館から移管された「本館品」と、従来未登録であった資料を新たに登録した「古蹟品」に含まれる。そのほか、南山品・徳寿品・井内品といったその他の資料群や、時代未詳の資料の中にも樂浪資料が存在することが報告されている（오영찬 2004；최정아 2021）。
- 8) 樂浪墳墓出土品の中には、出土地点を特定できない例も少なくない。こうした資料は、編年的検討のみならず、考古資料としての信頼性においても制約を残す。そのため、上述の方法を含め、当時の公文書・写真資料など多様な記録と実物情報を総合的に照合し、出土地点を再確認していく作業が継続的に求められる。
- 9) 従来、底部にもとづく樂浪土器壺の大別が困難であった背景には、形態的に判然としない資料が一定数認められる点がある。既往研究では、こうした資料の判定を保留するか、あるいは直観的に把握される形態的基準にもとづき、平底壺/平底壺に区分する例もみられた。筆者は、底部形態を生み出す「製作方式」に着目する必要があると考えた。樂浪土器の底部における主要な調整方式は、「叩き」と「糸切り」に大別される。「叩き」は、器体を分離したのち底面を打ち締めて整える工程であり、一般的には平底化を促すものの、その強度によっては平底に近い形態が現れる場合もある。他方、「糸切り」は底面を切断し平坦化する過程であり、基本的に平底形態を形成することになる。すなわち、結果として平底を呈している、両者は製作メカニズムが本質的に異なるため、一括して「平底壺」と総称することは適切とはいえない。とりわけ、「叩き」によって平底化した場合、その程度を基準化することは容易ではなく、図面上に形態が正確に再現されない例も認められる。この点を踏まえれば、区分基準として適用する際には慎重な検討が求められる。他方で、「叩き」が認められない場合、ほとんどの土器において「糸切り痕」が観察されることから、「糸切り」によって仕上げられた土器を「平底壺」とみなすことには大きな問題はないと考えられる。ただし、筆者の観察によれば、平底を呈しながらも「糸切り痕」が明瞭に残らない事例も一部に認められる。これは、調整の過程で痕跡が消失した可能性、あるいは調整自体を行わなかったか、へら等を用いて回転台から分離した可能性が考えられる。これらの事例を踏まえ、本稿では平底であって「叩き痕」が確認されない土器を「平底壺」として扱うこととしたい。
- 10) 計測値の信頼性が低いと判断されるもの、あるいは全体の分布における群集傾向から大きく外れ、散布図の解釈を妨

げる外れ値については除外した。

- 11) 鄭仁盛（2002）の記述（東京藝術大学陶芸科での観察による）によれば、現代陶芸においては、粘土塊をそのまま叩き伸ばす方法、あるいは団子状に成形した粘土を叩き伸ばす方法が用いられる。また、円柱状に成形した粘土を糸で適切な厚さに切り取り、それを叩き伸ばす方法も認められる。こうした叩き伸ばしの後には、轆轤の回転を利用し、へら等によって外縁を切り取って底部円板を成形する場合が多い。
- 12) 接合痕などに関わる成形方式については、主として肉眼観察に基づいて推定しているが、それによっても判別が困難な場合には、X線CT分析などの手法も検討対象となりうる。
- 13) 実見によれば、資料によっては底内面の螺旋状痕における凹凸の起伏の程度に、一定の差異が認められる。今後、こうした程度差が何を意味するのかについても、さらなる検討が求められる。
- 14) 共伴遺物（銅鏡・紀年銘資料など）および墳墓形式によって時期をより絞り込めると判断される資料については、別途その旨を付記した。その他の資料は、左欄に示した年代幅に属するものとして理解される。
- 15) 頸部形態から見れば、大きくはⅡ類に属すると判断される。ただし、底径が縮小し、胴部が球形に近い形態を呈する事例はさきわめて少ないため、本稿では暫定的に「その他」に分類した。

引用文献

〔日本語〕（五十音順）

- 有光教一・藤井和夫 2003 『朝鮮古蹟研究会遺稿Ⅲ：平壤石巖里第218號墳・平壤貞柏里第24號墳 發掘調査報告』ユネスコ東アジア文化研究センター・東洋文庫
- 関野 貞編 1927 『古蹟調査特別報告 第四冊 樂浪郡時代の遺蹟 本文』朝鮮總督府
- 高久建二 1993 「樂浪墳墓の編年」『考古学雑誌』78-4：33-77
- 高久健二 2009 「樂浪・帶方郡塚室墓の再検討—塚室墓の分類・編年、および諸問題の考察—」『国立歴史民俗博物館研究報告』151：161-210
- 朝鮮古蹟研究会 1934 『古蹟調査概報 樂浪古墳 昭和八年度』
- 朝鮮古蹟研究会 1934 『樂浪彩篋塚』古蹟調査報告1
- 朝鮮古蹟研究会 1935 『古蹟調査概報 樂浪古墳 昭和九年度』
- 朝鮮古蹟研究会 1935 『樂浪王光墓』古蹟調査報告2
- 朝鮮古蹟研究会 1936 『古蹟調査概報 樂浪遺蹟 昭和十年度』
- 朝鮮古蹟研究会 1938 『昭和十二年度 古蹟調査報告』
- 朝鮮總督府 1915 『朝鮮古蹟圖譜 樂浪・帶方郡時代・高句麗時代（一）』
- 朝鮮總督府 1917 『大正五年度 古蹟調査報告』
- 朝鮮總督府 1925 『古蹟調査特別報告 第四冊 樂浪郡時代の遺蹟 圖版』
- 谷 豊信 1984 「樂浪城址出土の土器（上）：樂浪土城研究その2」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』3：41-58
- 谷 豊信 1985 「樂浪土城址出土の土器（中）：樂浪土城研

究その3』『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』4 : 159-188

谷 豊信 1986 「楽浪土城址出土の土器(下): 楽浪土城研究 その4」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』5 : 73-124

鄭 仁盛 2002 『楽浪文化の考古学的研究』東京大学大学院博士論文

原田淑人編 1930 『楽浪: 五官掾王肝の墳墓』東京大学文学部

楽浪漢墓刊行會 1974 『楽浪漢墓』第1冊

楽浪漢墓刊行會 1975 『楽浪漢墓』第2冊

[韓国語] (五十音順)

이나경 2013 『중부지역 출토 낙랑계토기 연구』서울 大学大学院修士論文

李 賢惠編 2008 『일본에 있는 낙랑 유물』学研文化社

오영찬 2001 「낙랑토기의 제작기법」『楽浪』国立中央博物館, 237-245

오영찬 2004 「国立中央博物館 所藏 楽浪古墳 資料와 研究現況」『韓國古代史研究』34 : 41-70

国立中央博物館 1999 『光復以前調査遺蹟遺物未公開圖面 3 平安道·咸鏡道·黄海道』国立中央博物館所藏資料集第5卷 国立中央博物館

国立中央博物館 2001 『楽浪』술

国立中央博物館 2001 『鳳山 養洞里 埽室墓』日帝強占期資料調査報告2輯

国立中央博物館 2002 『平壤 貞栢里 8·13號墳』日帝強占期資料調査報告3輯

国立中央博物館 2018 『平壤 石巖里 9號墳』日帝強占期資料調査報告30輯

国立中央博物館 2021 『평양 오야리 18~21·25 호분-유구편』日帝強占期資料調査報告41輯

国立中央博物館 2022 『평양 오야리 18~21·25 호분-유물편』日帝強占期資料調査報告42輯

사회과학원 고고학연구소 2009 『락랑일대의 무덤(나무관 및 나무곽무덤)』조선고고학전서24, 중세편1, 진인진

사회과학원 고고학연구소 2009 『락랑일대의 무덤(귀틀무덤)』조선고고학전서25, 중세편2, 진인진

사회과학원 고고학연구소 2009 『락랑일대의 무덤(벽돌무덤)』조선고고학전서26, 중세편3, 진인진

高久健二 1995 『楽浪古墳文化 研究』学研文化社

최경아 2021 「국립중앙박물관 소장 낙랑유물의 현황과 조사」『“한국” 고고학, 한반도를 넘어서』제45회 한국 고고학전국대회, 215-220

鄭 仁盛 2012 「영동지역 낙랑(계)토기」『강릉 안인리유적을 통해 본 강원 영동지역 철기시대 문화양상』강릉 안인리유적 발굴 20주년 기념 학술대회 자료집, 105-116

鄭 仁盛 2014 「한반도 서북한지역의 토성」『낙랑고고학개론』진인진, 76-107

包 永超 2022 『古代 東北亞 木槨墓의 展開過程 研究』慶北大学大学院博士論文

안병찬·홍원표 1990 「새로 드러난 추릉리 벽돌무덤」『조선고고연구』1990(1), 사회과학원출판사

안춘성 2006 「승리동 86호 벽돌무덤 발굴보고」『조선고

고연구』2006(4), 사회과학출판사

안춘성 2007 「승리동 95호 벽돌무덤 발굴보고」『조선고고연구』2007(4), 사회과학출판사

안춘성·강영철 2016 「통일거리 2동 19호 귀틀무덤 발굴보고」『조선고고연구』2016(2), 사회과학출판사

과학원 출판사 1958 『대성리 고분군 발굴 보고』『유적 발굴 보고』5집 과학원출판사

과학원 고고학 및 민속학 연구소 1958 『고고학자료집』1 과학·백과사전출판사

과학원 고고학 및 민속학 연구소 1959 『고고학자료집』2 과학·백과사전출판사

과학원 고고학 및 민속학 연구소 1963 『고고학자료집』3 과학·백과사전출판사

김대영 2012 「대평동 벽돌무덤 발굴보고」『조선고고연구』2012(1), 사회과학출판사

김재용 2009 「승리동 83호무덤 발굴보고」『조선고고연구』2009(3), 사회과학출판사

고고학연구소 고적발굴대 2019 「통일거리동일대 무덤 발굴보고」『조선고고연구』2019(3), 사회과학출판사

고영남·안춘성 2013 「통일거리동 57호 벽돌무덤 발굴보고」『조선고고연구』2013(4) 사회과학출판사

고영남·백현남 2015 「통일거리동 73호무덤 발굴보고」『조선고고연구』2015(1), 사회과학출판사

고영남·전광진 2018 「전진동 2호 벽돌무덤 발굴보고」『조선고고연구』2018(4), 사회과학출판사

사회과학원 고고학연구소 1974 『고고학자료집』4, 사회과학출판사

사회과학원 고고학연구소 1978 『고고학자료집』5, 과학·백과사전출판사

사회과학원 고고학연구소 1983 『고고학자료집』6, 과학·백과사전출판사

차달만 2003 「리천리 1·2호 벽돌무덤에 대하여」『조선고고연구』2003(3), 사회과학출판사

차달만 2018 「리천리유적 제5지구 무덤발굴보고」『조선고고연구』2018(3), 사회과학출판사

장철만 1996 「마장리 나무곽무덤 발굴보고」『조선고고연구』1996(1), 사회과학출판사

조선유적유물도감편찬위원회 1989 『조선유적유물도감2 고조선·부여·진국편』동광출판사

도유호·황기덕 1957 「지탑리 유적 중간 보고(1)」『문화유산』1957(5), 과학원출판사

도유호·황기덕 1957 「지탑리 유적 중간 보고(2)」『문화유산』1957(6), 과학원출판사

도유호·황기덕 1961 「지탑리 원시유적 발굴 보고」『유적 발굴 보고』8, 과학·백과사전출판사

리순진 1974 「운성리 유적 발굴보고」『고고학자료집』4, 사회과학출판사

리순진·김재용 2002 『락랑구역일대의 고분 유적발굴보고』사회과학출판사

[中国語] (五十音順)

王 培新 2007 『楽浪文化: 以墓為中心的考古學研究』科学出版社

鄭 永振·李 東輝·鄭 京日 2014 『平壤一帶の楽浪墓葬 - 2010~2011年度發掘報告書』港亞洲出版社

[その他]

公益財団法人東洋文庫「梅原考古写真資料庫(database)(朝鮮之部)」https://www.toyo-bunko.org/umehara2008/ume_query.html

図版出典

図1～3・5～8(筆者作図)

図4: 1(樂浪漢墓刊行會 1975)、2(国立中央博物館 2018)、3・8(鄭永振・李東輝・鄭京日 2014)、4・5・10(李賢惠編 2008)、6(梅原考古写真資料庫(database)(朝鮮之部))、7(사회과학원 고고학연구소 1978)、9(朝鮮總督府 1927)、11(国立中央博物館 2022)

図9: 1・3:a・b・d・e・f(筆者撮影)、c(国立中央博物館 eミュージアム)、2:a(国立中央博物館 2018)、b・d・e・f(筆者撮影)、c(国立中央博物館 Eミュージアム)

図10: 1・2(筆者撮影)、3:a・b・d・e・f(筆者撮影)、c(国立中央博物館 Eミュージアム)

図11: 1・2(谷豊信 1984)、3・7(谷豊信 1985)、4・5・6(鄭仁盛 2012)、8・12(国立中央博物館 2018)、9・10・11・14・15(李賢惠編 2008)、13(国立中央博物館 2002)

図12: 1・2・3・4・5:a(国立中央博物館 Eミュージアム)、b・c(筆者撮影)

図13: 1・2・3:a・b・d・e・f(筆者撮影)、c(国立中央博物館 Eミュージアム)

図14: 1・2・3:a・b・d・e・f(筆者撮影)、c(国立中央博物館 Eミュージアム)

図15: 1・26・37(国立中央博物館 2022)、2(樂浪漢墓刊行會 1975)、3・11・12・14・22(鄭永振・李東輝・鄭京日 2014)、4・20(과학원 고고학 및 민속학 연구소 1974)、5(国立中央博物館 2018)、6(国立中央博物館 Eミュージアム)、7(장철만 1996)、8・25(国立中央博物館 2001)、9・13・16・18・19・23(사회과학원 고고학연구소 1978)、10(박승률 1967)、15・24(사회과학원 고고학연구소 1983)、17・28・31・38(梅原考古写真資料庫(database)(朝鮮之部))、21・27(李賢惠編 2008)、29(朝鮮古蹟研究會 1934)、30(안춘성 2007)、32(이나경 2022)、33・34・40(朝鮮總督府 1915)、35(안병찬·홍원표 1990)、36(과학원 고고학 및 민속학 연구소 1959)、39(国立中央博物館 2001)

図16: 1・14(国立中央博物館 Eミュージアム)、2(사회과학원 고고학연구소 1978)、3・18(고고학연구소 고적발굴대 2019)、4・33(国立中央博物館 2018)、5(조선유적유물도감편찬위원회 1989)、6・8(鄭永振・李東輝・鄭京日 2014)、7(박승률 1967)、9・12・13・22・23(사회과학원 고고학연구소 1983)、10・26(国立中央博物館 2022)、11(과학원 고고학 및 민속학 연구소 1963)、15・34(国立中央博物館 2002)、16・21(李賢惠編 2008)、17(朝鮮總督府 1927)、19(과학원 고고학 및 민속학 연구소 1959)、20(原田淑人編 1930)、24(이나경 2022)、25(朝鮮總督府 1915)、27(朝鮮古蹟研究會 1934)、28・35(有光教一・藤井和夫 2003)、29(안춘성 2007)、30(東京国立博物館)、31(고영남·전광진 2018)、32(樂浪漢墓刊行會 1975)、36(国立中央博物館 2001)、37(안병찬·홍원표 1990)

表1 本稿における主要編年対象資料一覧表 (出典略称: 朝総=朝鮮総督府、楽浪=楽浪漢墓刊行会、朝古=朝鮮古蹟研究会、사회=사회과학원고고학연구소、原田=原田淑人・田澤金吾、有光=有光教一・藤井和夫、안=안춘성、안흥=안병찬・홍원표)

連番	墳墓名	墓制	主要伴遺物の種類						時期	出典	
			銅鏡	車馬具	武器・工具	金属容器	漆器	装身具			その他
1	梧野里 20-2	同穴合葬木槨墓					耳杯、盤、盆、奩		種子	BC1C後半 [図15-1]	朝總 1935
2	石蔵里 219	同穴合葬木槨墓		金銅車軸頭、金銅轡、蓋弓帽、金銅馬面、鉄鍔、銅鐙、金銅環	鉄長剣、鉄短剣、銅矛、銅鏃、鉄戟、弩機、銅鏃、漆札甲、鉄斧	鉄鍔、銅盃、銅扁壺、銅博山炉	耳杯、盤、匣、奩、案、沓	玉(ガラス、水晶、瑪瑙)、銀耳環	銀印("王根信印")、銅印("王野之印")、四葉座金具、絹織物、瓦	BC1C後半 [図15-2、図16-32]	楽浪 1975
3	葛城里 甲	単葬木槨墓		鉄車軸頭、銅蓋弓帽、鉄銜、銅環	鉄矛、鉄斧			玉(水晶)、管玉	鉄片	BC1C後半 [図15-8]	朝總 1925
4	石蔵里 257	同穴合葬木槨墓	異体字銘帯鏡、方格規矩四神鏡	銅蓋弓帽、銅轡、銅環	鉄剣、鉄刀子、鉄戟、銅鏃		耳杯、盤、杓、匣、奩、案、筒、沓	玉(ガラス)、帶鈎	四葉座金具、絹織物、銅刷、銅釘	BC1C後半 [図16-1]	朝古 1936
5	石蔵里 9	同穴合葬木槨墓	内行花文鏡	銅車軸頭、銅蓋弓帽、金銅馬面、金銅轡、銅鐙、金銅杏葉、金銅環	鉄長剣、鉄刀、鉄矛、銅鏃、鉄戟、銅弩機、鉄斧	銅鼎、銅釜、銅盤、銅尊、銅甕、銅鐘、銅博山炉	耳杯、盤(AD8)、椀、蓋、案	玉(ガラス、瑪瑙)、獅子形玉	玉印("永壽康寧")、葬玉(璧、瑄、鼻塞、充耳、眼玉、塞杆、玉豚)	AD1C前半 [図15-5、図16-4・33]	朝總 1925
6	貞梧洞 1	同穴合葬木槨墓	方格規矩四神鏡			銅鼎、銅甕、銅鍔、銅小壺	耳杯(BC85、AD5)、盤、果盤、奩、案	玉(ガラス)、玉環、銅、帶鈎	玉璧、四葉座金具、飾釘、土管	AD1C前半 [図16-5]	사회 1983
7	貞梧洞 11	同穴合葬木槨墓	方格規矩四神鏡	鉄轡	鉄長剣、鉄刀、鉄戟、鉄斧		耳杯、案	玉(ガラス)、帶鈎	石硯	AD1C [図15-15]	사회 1983
8	貞梧洞 3	同穴合葬木槨墓	内行花文鏡		鉄長剣	銅壺	耳杯、盤、壺、瓶、杓、匣、奩、案	玉(ガラス)、耳環	銅印("韓競私印")、四葉座金具	AD1C [図16-9]	사회 1983
9	順川里	木槨墓・埴室墓	方格規矩四神鏡	銅車軸頭、蓋弓帽、笠形銅器、乙字形銅器、金銅馬面	鉄長剣、銅鏃、鉄戟、鉄斧	鉄鍔、銅鐘、銅鏃斗		玉(ガラス)、骨製管玉	銅刷、飾釘	AD1C [図16-19]	과학 1959
10	貞柏里 127	埴併用木槨墓(高久2009)	異体字銘帯鏡、方格規矩四神鏡	銅蓋弓帽、金銅馬面、銅銜、金銅轡、銅環	鉄長剣、鉄短剣、鉄刀、弩機、漆鞘	銅小壺	耳杯、盤、洗、高杯、杓、七、匣、奩、几、案	玉(ガラス、瑪瑙、琥珀)	木印("楽浪太守豫王光之印")、"王光私印"、筆	AD1C中葉? [図16-14]	朝古 1935
11	石蔵里 205	同穴合葬木槨墓	内行花文鏡、細線式獸帯鏡		鉄長剣		耳杯(AD45-52)、盤(AD69)、盃、椀、杓、七、奩、案、天地盤	玉(ガラス、琥珀、石炭)、玻璃耳環	木印("五官豫王王野之印")、"王野印信")、絹織物、飾釘	AD1C後葉 [図15-21、図16-16・20・21]	原田 1930
12	貞柏里 8	同穴合葬木槨墓	浮彫式獸帯鏡					玉(ガラス、琥珀、石炭)、ガラス耳環		AD1C後葉 [図16-15]	朝古 1934
13	梧野里 21	同穴合葬木槨墓	四乳渦文鏡				耳杯(AD71)、盤	玉(ガラス)、黒曜石耳環	種子	AD1C後葉~2C前葉 [図15-37、図16-10]	朝總 1935
14	石蔵里 6	埴併用木槨墓(高久2009)	方格規矩四神鏡、内行花文鏡				耳杯、盤、匣、案	琥珀扁玉、ガラス耳環	石板	AD2C前葉 [図16-17]	朝總 1925
15	梧野里 25	埴室墓(二室)	内行花文鏡、盤龍鏡					玉(瑪瑙)、玻璃、飾玉耳環		AD2C中葉 [図15-26、図16-26]	朝古 1938
16	石蔵洞	埴室墓(二室)	内行花文鏡、盤龍鏡		鉄環頭刀、鉄戟	銅鍔	金銅飾金具	指環、釧	五銖錢	AD2C後葉前半 [図15-27]	朝總 1915
17	石蔵里 218	埴室墓(一室)	盤龍鏡		鉄剣把			玉(ガラス)	銅釘	AD2C後半 [図16-28・35]	有光 2003
18	貞柏里 221	埴室墓(一室)	内行花文鏡、浮彫式獸帯鏡			銅環頭刀	耳杯、盤、鉢	ガラス耳環、指環	大泉五十	AD2C後葉 [図16-27]	朝古 1934
19	貞梧洞 2	埴併用木槨墓(高久2009)	内行花文鏡				耳杯、盤、案	玉、ガラス耳環、指環	五銖錢、絹織物、飾釘	AD2C後葉~3C前葉 [図15-24、図16-23]	사회 1983
20	南井里 116	木室墓	浮彫式獸帯鏡	明器(蓋弓帽、車輪、車轡、銜、鉛轡轡、木馬、木俑)	漆鞘鉄刀子、木鏃		耳杯、盤、椀、把手付椀、壺、杓、七、匣、奩、案、卷筒、硯台、革沓、金銅飾金具	指環、釧、紗帽、釵子、帶鈎	瓦当("萬歲")、木札、五銖錢、貨泉、絹織物、石硯、瓦、瓢、枕木、帶革、種子、貝殻	AD2C後葉後半~3C前葉 [図15-29]	朝古 1934
21	勝利洞 95	埴室墓(一室)	内行花文鏡、半円方形帶神獸鏡		鉄長剣、鉄環頭刀	銅盤	耳杯、奩、案	玉(ガラス)、ガラス耳環	五銖錢、四葉座金具、鉄釘	AD2C後葉後半~3C前葉 [図15-30、図16-29]	안 2007
22	道濟里 50	埴室墓(二室、耳室)	方格規矩四神鏡、鉄鏡	明器(銅車軸頭、銅蓋弓帽、銅轡、銅鐙、雲珠)	漆鞘銅劍、鉄環頭大刀、鉄環頭刀、弩機	銅獸形水滴、鉄燭台	壺、匣、奩、蓋、案、硯台、棒		五銖錢、鉄釘、鉛鈎、鉄鈎手	AD2C後葉後半~3C前葉 [図15-31]	朝古 1936
23	楸陵里	埴室墓(一室)							館文場("太康四年"-AD283)	AD3C末 [図15-35、図16-37]	안흥 1990

A Study of Lelang Flat-Bottomed Jars: Reconstructing Typology, Manufacturing Techniques, and Chronology

Jung Jae-Hyun

Research on Lelang pottery has developed into a systematic framework since the 1980s, primarily through analyses of ceramics excavated from earthen fortresses, focusing on clay composition, vessel morphology, and manufacturing techniques. FBJ (Flat-bottomed jars), however—most of which come from burial contexts—have received comparatively little focused examination. As a result, specific aspects such as their typology and manufacturing methods have remained insufficiently defined, and inconsistent classificatory criteria have hindered discussion of their chronological development. This study addresses these issues through a comprehensive reassessment of Lelang FBJ, centered on typology, manufacturing techniques, and chronology.

The dataset includes recently published burial materials as well as previously unexamined sources, including North Korean reports and items registered in the National Museum of Korea's E-Museum. In the typological analysis, measurable attributes were used to clarify distinctions between vessel types and forms, while direct inspection allowed for detailed identification of type-specific manufacturing traits. Chronological placement was refined by examining associated finds—such as bronze mirrors—along with inscribed-date materials and burial types, enabling the reconstruction of the sequences for SN (short-necked) and LN (long-necked)-FBJ.

The analysis identifies both standardized manufacturing practices shared across Lelang FBJ and finer distinctions observable in specific forms. Chronologically, SN-FBJ appear in the late first century BCE with multiple sub-types of Type I already present. Type II emerges in the early first century CE and becomes predominant by the second to third centuries, accompanied by an overall rise in vessel height and diversification of forms. LN-FBJ also originate in the late first century BCE but in smaller quantities; their production expands rapidly in the first century CE, with Type I predominating until Type II becomes dominant around the second century.

In sum, both SN- and LN-FBJ originate in the late first century BCE and continue into the third century CE, sharing broad tendencies toward increased vessel height, larger body size, and a shift from Type I to Type II. Nevertheless, the two types follow distinct developmental trajectories in terms of initial appearance, relative proportions, and choices of manufacturing techniques. By integrating newly accumulated data and reassessing FBJ within revised classificatory criteria, this study establishes a foundational framework for re-evaluating the typology, manufacturing techniques, and chronological development of Lelang FBJ.

낙랑 평저호 연구 - 분류 · 제작기법 · 편년의 재구축 -

정재현

낙랑토기 연구는 1980년대 이후 토성 출토품의 분석을 바탕으로, 태토·기형·제작기법을 중심으로 일정한 체계를 이루어 왔다. 분묘 출토품이 중심을 이루는 평저호는 타 기종에 비해 개별적 검토가 상대적으로 미비하여, 분류와 제작기법 등 구체적 양상이 명확히 규명되지 못하여 왔다. 구분 기준이 정착되지 않았던 상황으로 인해, 기종과 형식에 따른 시기적 전개 역시 충분히 논의되지 못하였다. 본 연구는 이러한 문제의식을 바탕으로 분류, 제작기법, 편년의 세 측면을 중심으로 낙랑 평저호에 대한 종합적인 검토를 수행하였다.

연구대상은 최근 보고를 비롯해 북한학계 미검토 자료와 한국 국립중앙박물관 E-뮤지엄 등록품 등 기존 연구에서 활용되지 않았던 신자료를 폭넓게 포함하였다. 먼저 분류에서는 계측 가능한 속성을 살려 기종 및 형식 구분을 명확히 하고, 실물 관찰을 통해 낙랑 평저호의 기종별 제법적 특징을 구체적으로 파악하였다. 또한 토기와 함께 출토된 청동경 등의 공반유물과 기년명 자료, 무덤 형식을 기준으로 시기를 비정함으로써 평저단경호와 평저장경호의 편년을 재구축할 수 있었다.

이상의 검토를 통해 낙랑 평저호에서 공유되는 정형화된 제작기법과 함께, 일부 형식에서 드러나는 세부적인 특징을 밝힐 수 있었다. 편년적 검토에서는 평저단경호의 경우 I류가 기원전 1세기 후반경 등장해 출현기부터 여러 형식이 다량 확인된다. 기원후에는 II류가 본격적으로 출현해 점차 증가하며 2~3세기의 중심을 이루게 되는데, 다형식이 공존하며 전개되는 특징을 보인다. 평저장경호 역시 기원전 1세기 후반의 출현이 인정되지만 평저단경호에 비해 한정된 수량이 확인된다. 기원후 1세기에 들어서며 출토량이 크게 늘어나고 I류가 유행하는 양상을 보인다, 2세기를 전후해 II류가 주를 이루는 변천이 인정된다.

요컨대 두 기종 모두 기원전 1세기 후반에 출현해 기원후 3세기 이후까지 지속되는 가운데, 기고가 높아지고 크기가 대형화되며 I류에서 II류로 이행하는 큰 흐름이 확인된다. 다만, 그 과정에서 출현기의 양상과 시기별 비중차, 제작기법의 채용 등에서 차이를 보이며, 각 기종의 상이한 전개 역시 파악할 수 있었다. 본 연구는 최근까지 축적된 자료를 반영해 새로운 기준에서 낙랑 평저호를 검토함으로써, 그 분류 · 제작기법 · 편년을 재정비할 수 있는 기초적 틀에 일조하는 의의를 지닌다.